早稲田文学

¥0

good job! BUNGAKU

WASEDA bungaku FreePaper

Vol.01_2005_11

火まつりと呼び慣らわされる、物故した小説家が名を知らしめた田舎の祭り

モブ・ノリオ

先ごろ、私は、「年齢雑話」の中で、「私と同年配のある男は、いわゆる「早生まれ」であって、尋常小学六年制五年修了から六年を飛び越して……以下も、すべて旧制の学校です、……

大西巨人

角田光代＋重松清

高原英理

「日々是革命」を銘じたいと思うが、もちろんうまくはいかない。「趣味＝革命」程度である。しかし、革命のきっかけは日常ゴロゴロころがっている。毛沢東が言ったように、革命無罪」は普遍的な真理だろう。この連載では、革命などかつてなかったし、これからもないだろうと安心しきっている馬鹿な輩を少しでも威嚇すべく、誰もが決起：

絓 秀実

毎朝床の中でうとうとしながら聞く豆腐屋の喇叭の音が此頃少し様子が変ったやうである。もとは、「ポーピーポー」といふ風に、中に一つ長三度位高い音を挿んで、それがどうかすると「起きろ、オーキーロー」と聞こえたものであるが、近頃は単に……

斎藤美奈子

詩集『黒衣聖母』（一九一二）序文で自らの詩形を「ゴスィック・ローマン詩髄」と呼んだ詩人日夏耿之介の文業以後、ともあれ「ゴシックロマンス」といい暗く黒く晦渋な怪奇な文学が海彼にあるとは、……

川端康成『雪国』といえば、国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」である。知らない人はいないザ・日本文学。だ、しかし、この「雪国」何か変な気がしないだろうか。駒子や葉子がしゃべる日本語が、私にはしっくりこない……

島田雅彦→寺田寅彦

ユルいインタビューをさせてもらいます。角田光代さんの愛嬌や、作品を批評的に読んでいるひとには申し訳ないぐらいのユルさです。でも、あんがいと肩の力を抜いたフニャフニャ……

福永信＋長嶋有

福永●きみこはいずれ筆談すると思っていた。／長嶋●フフフ。そうなんですか。／福永●そうさ。／長嶋●二泊三日の大阪京都行は若干ハードだったナァ。

横田創

日々の生活の、仕事の、勉強の、気晴らしでも骨休めでも気休めでもなくPartyをしよう。jamiroquaiの

大杉重男

私がこれまでに見た最も印象的な朝日の光景は、二〇〇一年に見たリヒャルト・シュトラウス作曲の楽劇『サロメ』の舞台である（ドイツ・ザクセン＝アンハルト歌劇場来日公演、オーチャードホール）サロメ役のラッパライネンというソプラノは元ミス・カリフォルニアという美貌とプロポーション）後者は特にオペラでは貴重なのだが、を生かして、……

いとうせいこう＋奥泉光

いとうせいこう●ごうですか？　奥泉さんの青春もしくは幼少時代の本屋さん。

奥泉光●「三一書店」というのがあってね。間口が二つあって、小さいほうで楽器を売ってるんです。

いとう●奥泉さんがフルート吹いちゃう原点なんですかね。

渡部直己

たとえば、信号機の「青」は実際には緑色。オーソドックスな三色信号でも、押しボタン式のランプでも、あれはほとんど緑なのに何故「青」信号と呼ばれるのか？　変だと思う人は大勢いるらしく、以前、NHKの番組『戦時下』をこうに越えて翻訳下である現在の「文学」について書くべく思って、一度は別の原稿を渡したが、考えてみれば文学が翻訳化するという自明のことについて記すことは全くの無駄だ……

大塚英志

わかりん?! 文学

Wonderful BUNGAKU

人生設計をしないまま、芥川賞を獲ってしまった男の'05年初の小説

スローガン

モブ・ノリオ

MOB Norio

火まつりと呼び慣らわされる、物故した小説家が名を知らしめた田舎の祭りに、その作家ゆかりの市民文学講座で知り合い、後に一〇年近くも付き合うことになった友人に誘われ、約一〇年ぶりに参加した――そんなことがあったのは去年の出来事に過ぎないのに、もう随分遠い、戻ることのできない昔日のようで、しかし一方、日だまりの温みに溶けて消えた方が自然な記憶が、たぐり寄せずともまだ傍にあることが疎ましい。

その祭りに参加する男らは、自分のような遠くから来た部外者までもが氏子と呼ばれた。白い装束の上から藁縄を腰に五重六重にも回して締めるために、氏子らは、祭りの当日、昼のうちから地元の商工会議所に集まり、着付けを手伝う世話役らの手によって、言われるがまま、胴体に綱を巻きつけてもらう。その時ばかりは旅行者の自分も土地の子になった気分で、幼かりし日の地蔵盆や村の行事ごとをかすかに懐かしませる雰囲気に和みつつ、かと言って他所者ゆえの身の置き場のなさを気にし過ぎた、薄い緊張の貼り付く曖昧な笑みを匿うこともできず、糸巻きの芯みたくぐるぐる回って自分の腹に人任せの綱が固く結わえられるのを屈託なく面白がる、その素振りをなるだけぶっきらぼうに装っているようだと、自らの内をぼんやり映す自分の視線を振り払うこともなく置き去りにして、その場をやり過ごした。子供時分に、市の小学生相撲大会で褌まがい

のまわしを締めた時も、前から後ろに、尻の下から腰の上へと通した帯を引っ張り上げる最後の仕上げは、男の体育教師が両の手で力を絞って、痩せた小力士の足が踏ん張りを保てず一瞬宙に浮き、そのまま持ち上げられてカニのような動きを見せるまで吊り上げたものだった。

前屈するのも厳しい絞まりで腹巻上に巻き上げられた藁縄の、巻き余りが鎌の刃で落とされ、床に敷いたビニールシートの上でばらばらの藁に戻って散らばると、これもどこか、すっかり自分とは縁がなくなってしまった、祖父が元気な頃は親族総出で駆り出されたきを思い出した。この綱が、祭りの最中には、腹を殴られたり突かれたりしても平気なように、鎧の役目を果たす、と聞いたが、初参加した一〇年前も二度目のこの日も、自分は殴られることも殴ることもなかった。

世話役らが綱の支度に追われる同じ大会議室には、長机が何列にもなって並べられ、地元の子供から数少ない年寄りまで、男ばかりがめいめい長机の上に荷物を置き、着替えの場所を確保している。そこに、この地に縁のある友人のお蔭で自分は割り込ませてもらうのだが、毎年この時期に東京から祭りのために訪れる、生前の地元作家と親交のあった俳優の名や、〈出版社関係〉の文字を簡易に印刷して貼った一角もあり、人数の割に広く占められた特別の空間が横目にも気になるのを、頭から払うように、そそくさと着替えを済ませようと努めた。ここで身に着けるすべてを白一色に統一して、一旦綱を締めてしまえば、後はもう、夕暮れ前には酒を呷って松明を担ぎ、擦れ違いざまに無数の氏子らと松明を搗ち合わせて、神山の頂を目指すばかりだ。

極端に先の尖った二等辺三角形の杉板を六枚か七枚、それぞれ先端の頂点同士、それに二つの等辺同士を接して合わせるように組んだ、長い角錐の松明を氏子らは専門の店で買う。頂上の社の前で、神からの火を継いで授かり、山の下まで届けるための、また、氏子同士の諍いの道具にもなる松明の側面には、各自が年毎の祈念の言葉を筆で記すことになっている。

それを、

「いい四文字熟語ないかなあ」

と、同行の、青年期から始めて、中年になってからも小説を書き続けている友人が無邪気に尋ねた。

彼が火まつりの松明に書かんとするのは、〈言葉〉ではなく〈四文字熟語〉なのであった。自らが小説を書く者のはずなのに、書くべき言葉がないどころか、それが〈熟語〉などと、試験勉強みたいなことを言うとは。

言葉を、神という非存在を通して、究極はその果てには己自身に、或いは己自身を超えたところに在る、非存在としての自己に、或いは神から最も遠い、神なる概念を無化する崇高な自由に向かって——と、そこまで言うのなら、燃え盛る棒切れを振り回す野蛮人の祭りになど来なければいいのだが——ともかく、未だ出会わぬなにものかに向けて自らの言葉を差し出すこの行為と、気乗りしない課題提出を目前に控えた学生じみた要領で、物理的署名に近い感覚の〈四文字熟語〉を書き付けるのとでは訳が違う。現実界には〈四文字熟語〉などが存在しないことを、中年に差しかかってから小説のようなものを書き始めた自分は既に知っていた。だが友人は、〈四文字熟語〉を探すように〈小説〉を書こうとしていたり、それを書けないと悩んでいたりしたのかもしれなかった。自分は、彼がろくな小説を書けずにいるのだろうと確信した。

書くべき言葉が書き手の内部にないという事実は、書き手の現実を表すに相応しい言葉を探り求める生命が、自身に欠如していることと同義である。もし、求めた言葉が四つの漢字で綴られずとも、それが動かしようもなく在るのならば、その日、その場所で書かれなければならない言葉を、多くの氏子らが四文字の漢字で記して来た歴史や流儀に反してでも、書かないのなら祭りに臨む意味などない、たとえ杉の棒切れが耳なし芳一みたく墨で真っ黒になろうとも——どうせ、炎を宿し灰に化けて散り散りと舞い上がって、どの灰が誰のものでもなくなり、参詣を禁じられた、男らを見守る女らの願いや祈りをも乗せて運び、灰になった松明は早春の夜空に吸い込まれてなくなるのだから。

心の内実とでも言おうか、その要請や必然がないのに、心の内を、真実を表象せよと無理に迫られる時、人は、己の、表象しようとする意思の不在、或いは、自己の空虚さを見つめられなければ、慣例や体裁に気を奪われ、その虜となる。そうして、現実が一回限りだということを忘れてしまう。

現実が一度限りでないのならば、自分は、喜んで現代の奴隷制を信奉しよう。

「〈弱肉強食〉の〈肉〉と〈食〉は、〈焼肉定食〉の〈肉〉と〈食〉とどこがどう違う、はっきり言ってみろ！」

もしや、車の中でこんな風に怒号した方がよかったのだろうか？　友人の妻でもある美里さんと友人と、三人で山腹のトンネルの中で車を止めて、エンジンをかけっぱなしで漢和辞典の〈肉〉の部の最初の項目と、〈しょくへん〉の冒頭、〈食〉が頭につくすべての語を引き合った方がよかったのだろうか？

友人が週に何度かは行列に並んでまで食べるというラーメンや、彼に二〇分おきに蓋を開けさせ、液晶画面に走る文字列の確認を要求する携帯電話の病んだニュースサービスには、くれぐれも用心しなければならない、やがては彼のようになってしまうのだから、と私は友人を観察しながら肝に銘じた。

「〈弱肉強食〉の〈肉〉も〈食〉も、〈焼肉定食〉の〈肉〉と〈食〉と同じに決まっているじゃないか。君は、〈弱肉強食〉の漢字の意味を意識しながら〈焼肉定食〉を食ったことがないのだろう？」

但し、友人の妻・美里さんは、祭りのその日は、火の点いた松明を酒に酔った男らが大声で掲げるホモ的祝祭には端から興味がないらしく、宿舎でひとり読書をしていたので、〈四文字熟語〉の件には関わりがなかった。したがって、火まつりの松明に書く言葉を巡っての問題は、彼と私との間だけのことなのであった。

ところが事態は、我々素人間の問題だけでは済まなくなってしまった。

話は再び先の商工会議所へと戻る。すると、世話人の年長者らに、道に停めた車を動かした方がいい、祭りの終わりまでなら向かいのＮＴＴに停められるから、と忠告を受けている男が見えるだろう——それが私である。

会議所の二階の窓から外を見下ろそうと彼が（つまり、私が）窓際に近づいてみると、窓のすぐ傍の机には、東京から来た〈出版社関係〉の人間の、着替え終わった衣服や私物が松明と一緒に雑然と固められていた。何気なく目を留めた一本の松明の白い木地に、〈文運隆盛〉と墨書きの字が浮いているのを見て、彼は目を逸らした。嘘臭かった。しかし、よく見れば、その周りで祭りの本番を控える他の〈出版社関係〉者らの松明、三本か四本のどれもに、筆の巧拙と墨の濃淡以外に差のない四つの漢字のセットが、それぞれ一枚のシールのように、恥ずかしげもなく並んでいたのであった、それが〈文運隆盛〉という言葉であることへの違和を、微塵も覚えておらぬ麻痺した不貞不貞しさで。そして、その四つか五つの、死体化した〈文運隆盛〉が、〈出版社関係〉者らと生きた言葉との距離を、つまりは、出版物に頼って日本語を読み、書き、考える数多の人々にとっての〈文運〉の悲しき未来の一端を明示していた。おそらく、毎年惰性で書かれていると睨んで間違いない他人事が、成就するはずがなか

った。独特の毛筆書体で言葉を印刷したプラスチックの白い杭が、その杭を発案した宗教団体とは無関係の寺社仏閣の境内に突き刺さっており、それがいけしゃあしゃあと、〈世界人類が平和でありますように〉などと手前らの我欲に根ざした利己的行動を棚に上げ、仮想世界の他人事風に世界人類の平和を祈る――だが、本心から〈世界人類の平和〉を願うのであれば、第一に、その利権争いが世界中で戦争の種を産み落とし続けている石油、化石燃料を資源とした、プラスチック製の杭への疑念が湧くべきではないのか――他人事というのは、こういうことだ。

〈出版社関係〉者ら、しかもおそらくは地元作家と関わりもある文学の編集者にとって、職業上最も無難な常套句として、暗黙裡に選ぶことが望ましいとされてきたのかもしれぬ〈文運隆盛〉を、神事の場で手書きながらも複製する行為が、個々の氏子の、言葉への責任の放棄でないのならば、これも〈四文字熟語〉的標語の呪縛と脅迫なのだろうか。

現実界に、穴埋め試験問題の〈四文字熟語〉的世界を現出せしめているのは、存在しない架空の出題者などではなく、自由を担っているはずの回答者たちである。そうして、模範的回答者たちによる一見自由な言葉の表出に基づき益々不自由になる現実が、まるで予備校の休み時間の、学生という名の浮浪人を行儀よく骨抜きにする、贋の開放された一〇分間を彼に連想させた。すると、たちまちひとつの疑念が膨らんだ。いつも管理された場所から落ちこぼれた気でいる癖に、しかし本当の意味ではこぼれ切れず、落ち切れずに、無駄に歳と苛立ちばかりを重ねた彼こそが半端な劣等生特有の皮肉を持て余しており、結局少年期から何も変わらぬまま、彼は、根の深いところでは、なすすべもなく、未だに生の諦めをなぞり返しているつもりでいながら、しかし真相は、大昔に親や学校に期待された通りの優等生的な他人の人生を今でも猛烈に嫉妬し羨んでいるのかもしれなかった。そうすると、松明に記す〈四文字熟語〉への憤りさえ、すべて卑しい妄想でしかない気がして不意に気を失いそうになった。（但し、それが卑しい妄想かどうかを確かめようと思うのなら、彼が今後、お望み通りの優等生的な人生を実現し、然る後に同じ事象を再度熟考しさえすればいいのだ、ということをこの時の彼はまだ知りはしない。）

二度目か三度目の、中年を迎えてからの、大学教育を経験している人間がやり直す大学受験のための高校生活が、如何に人間性を剥奪された、砂を噛むような性質のものか。自分はもう濃密に味わい過ぎて、少なくとも、優に一〇年は繰り返し収監され続けたその夢の中にいる時には、他の人生を夢見るというその行為自体を夢見たこともないほど、永遠に終わらない無駄な罪滅ぼしの、生きる苦痛を看過するために神経を磨り減らす理不尽を生きて来たのだ。コンクリートの灰色が頭上に重くのしかかる学び舎で、中国残留孤児が着ていたような紺の詰襟の背を猫背で丸め、年下の、自分を嘲る目を持つ生徒らに混じって、ひょっとすると自分より若く幼いかもしれぬ、顔の見えない教師の聞こえない話を聞かずに済ませるべく、報われない時間を机の上に身を屈めてやり過ごしている。

自分は、靄の中にいるような人生二度目の高校生活で、大学入試に失敗しかかっているか、或いは、一〇年一五年以上も前に出てせいせいしたはずの高校の、二年から三年に上がれずにいるか、それとも、その生まれ変っても二度と戻りたくない母校に入学するために、なぜか同じ高校で試験の答案用紙に縛られているかで、ともかく、高校に入り直し、かつて現実に合格したはずの大学を受験し直そうと、また懲りずに、陰惨な人生行路を再び辿る気でいるのだ、勤め人の暮らしを知らぬわけでもない自分が。それでも、夢の中で真面目に勉強をしている様子は見られない。ずっと、嫌だ嫌だと腐りながら椅子を温めている。苦しさの余り勉強などが出来る状況にないのは、本物の高校生活みたいで、その状況こそがひとつの大失敗であるというのに、近い将来の、失敗が確約された受験への不安ばかりを募らせて、身動きが取れなくなっている。

大学生の頃から見始めた、中学、小学校を、果ては幼稚園をやり直す悪夢に起源を持つ、二回目三回目の高校での受験生活を、眠りに就く度にレコードの針飛びみたく延々と繰り返す夢見の滋養が、実際の生活そのものにあることは疑うべくもなかった。結局は、実生活でのやるべきことを果たせずにいる時、やらずにいる時、怠けている時の反動という単純な現象であったが、それにしても三十路の自分が未だに受験生的基準に縛られているのは癪に障る。もう、いいではないか。実働への負い目が、学歴とか、職歴、肩書きの不足として表される発想がどうしてこうも自分につきまとうのか、それとも、余程特別な社会的地位を手に入れない限りは、この悪夢を背負い続けるのだろうか――しかし、幾ら覚めている間に苛立とうが、夢の中身は一向に変わらなかった。

火まつりから帰って来て何日後か何週間後か、また私は夢の中で高校生になっていた。教室に押し込められて、嫌々ではあったが、もしかすると授業を聴こうとしていたのかもしれなかった。授業を聴こうとしていても、やはりひと回り以上も年下のクラスメイトからはどこかで蔑まれているようでもあった。そういう空気が薄く教室には蔓延していた。その、現役高校生らに蔑まれていることよりも、男ばかりの教室にいて聴く値打ちのない授業をじっと聴かされている状態が、人生への冒瀆じみて耐え難かったのだ――もしそうだとしたら、私は初めて一連の夢の中で、真面目に自分の時間と向き合ったのかもしれない。気がつけば授業時間中にも拘わらず、立ち上がって椅子か棒のようなものを振り回し、教室と廊下のすべての窓ガラスを粉々に砕いて回っていた。一気に風通しがよくなったと感じたが、もう教室に留まる理由もなかった。私は運動場にいて、壊した教室をそのままにして去ってゆく。校舎を背景にしながら、しかしその背後を振り返らなかったと思う。学生服を腕まくりした自分の腕のイメージばかりを覚えている。十数年来、昼間の人生にも陰気な影を落として来た学校物の夢で、初の校舎の外だった。味わったことのない奇妙な爽快感で目覚めて、なぜか、とうとうやってしまったと感じた。いつ終わるのかもわからない、長い一冊の本を読み終えた時のようでもあった。その日を最後に、不思議なことだが、もう二度と学校の夢を見ることはなかった。

そして昨夜、テレビを見ていると、私の出身高校が少子化による経営難のために学校経営を廃業し、空いた校舎がそのまま養鶏場に転用されるとのニュースが流れた。かつて知事選挙にも立候補して惨敗した理事長一族の長男が、南海電車に身投げしたことも併せて報じられていた。

とめどなく、嬉し涙が私の頬を伝った。

祭りの晩、神倉山頂で出会った若い子連れの男は、昔は先を争って殴り合いも厭わず山を駆け下ったものだが、ここ何年か、子供が出来てからは群集が皆降り切ってから、最後に山を降りていると語った。松明にはどんな言葉を書いたのか、と尋ねると、

「まあ、やっぱり、〈交通安全〉とか、〈家内安全〉とか」

よく見れば、若い頃は喧嘩っ早かったのではないかと思わせる眼が、照れ臭そうに笑った。

モブ・ノリオ ⊙MOB Norio
70年、奈良県生。大阪芸術大学卒、同専攻科除籍。
無職か小説家かいまだ判断つかぬまま芥川賞受賞から
一年が過ぎる。

現代作家が選ぶ世界の名作◉第一回　島田雅彦

物売りの声

寺田寅彦

毎朝床の中でうと〳〵しながら聞く豆腐屋の喇叭の音が此頃少し様子が変つたやうである。もとは、「ポーピーポー」といふ風に、中に一つ長三度位高い音を挿んで、それがどうかすると「起きろ、オーキーロー」と聞こえたものであるが、近頃は単に「ププー、プープ」と云ふ風に、唯一と色の音の系列になつてしまつた。豆腐屋が変つたのか笛が変つたのかどちらだか分らない。

昔は「トーフイ」と呼び歩いた、あの呼声が一体何時頃から聞かれなくなつたかどうも思出せない。凡ての「亡び行くもの」と同じやうに、何時亡くなつたとも分らないやうに何時の間にか亡くなり忘れられ、さうして、亡くなり忘れられたことを思出す人さへも少なくなり亡くなつて行くのであらう。

納豆屋の「ナットナットー、ナット、七色唐辛子」といふ声も此の界隈では近頃さつぱり聞かれなくなつた。その代りに台所へのそ〳〵黙つて這入つて来て全く散文的に売り付けることになつたやうである。

「豆やふきまめー」も振鈴の音ばかりになつた。此頃はその鈴の音もめつたに聞かれないやうである。一と頃流行つた玄米パン売りの、メガフォーンを通して妙にぼやけた、聞くだけで咽喉の詰まるやうな、食慾を吹飛ばすやうなあのバナールな呼声も、此れは幸にさつぱり聞かなくなつてしまつた。

つい二三年前迄は毎年初夏になるとあの感傷的な苗売りの声を聞いたやうな気がする。「ナースービノーナヘヤーア、キウリノーナヘヤ、トオーガン、トオーナス、トオーモローコシノーナヘ」と云ふ、長くゆるやかに引延ばしたアダヂオの節廻しを聞いて居ると、眠いやうなうら悲しいやうな遣瀬のないやうな、併し又日本の初夏の自然に特有なあらゆる美しさの夢の世界を眼前に浮かばせるやうな気のするものであつた。

此れと対照されていゝと思ふものは冬の霜夜の辻占売りの声であつた。明治三十五年頃病気になつた妻を国へ帰してひとりで本郷五丁目の下宿の二階に暮してゐた頃、殆ど毎夜のやうに窓の下の路地を通る「花のたより、恋のつじーうら」といふ妙に澄み切つた美しく物淋しい呼声を聞いた。その声が寒い星空に突き抜けるやうな気がした。声の主は年の行かない女の子らしかつた。それの通る時刻と前後して隣の下宿の門の開く鈴音がして、やがて窓の下から自分を呼びかける同郷の悪友TとMの声がしたものである。悪友と云つても藪蕎麦へ誘ふだけの悪友であつた。「あいつ、此頃弱つてゐるから引つぱり出して元気をつけてやれ」と云つて引つぱり出してくれる悪友であつたのである。

「按摩上下二百文」といふ呼声も古い昔になくなつたらしいが、あのキリギリスの声のやうにしやがれた笛の音だけは今でも折々は聞かれる。洋服に靴を履いた姿で、昔ながらの笛を吹いて近所の路地を流して通るのに出逢つたのは、つい数日前のことであつた。

盛夏の朝早く、「え、朝顔やあさがほ」と呼び歩くのは去年も聞いた。買つてくれなさうな家の附近では繰返し往復して、それでも買はないとあきらめて行つてしまつたのは昔のことで、今では矢張裏木戸から台所へ這入つて来て、主人や主婦を呼出すのが多いやうである。

「え、鯉や鯉」といふのも数年以来聞かないやうである。「え、竿竹や竿竹」といふのを一と月程前に聞いたのは珍らしかつた。

かういふ風に、旋律的な物売りの呼声が次第に亡くなり、その呼声の呼び起こす旧日本の夢幻的な情調も段々に消え失せて行くのは日本全国共通の現象らしい。

郷里で昔聞き馴れた物売りの声も今ではもう大概なくなつたらしいが、考へて見ると随分色色のものがあつた。その中には子供の時分の親しい思ひ出に密接に結び付いて忘られないものも可也多数にある。

夏になると徳島からやつて来た千金丹売りの呼声もその一つである。渡り鳥のやうに四国の脊梁山脈を越えて南海の町々村々を音づれて来る一隊の青年行商人は、みんな白がすりの着物の尻を端折つた脚絆草鞋ばきの甲斐々々しい姿をして居た。明治初期を代表するやうな白シャツを着込んで、頭髪は多くは黙阿弥式に綺麗に分けて帽子は冠らず、その代りに白張の蝙蝠傘をさしてゐた。その傘に大きく、たしか赤字で千金丹と書いてあつたやうな気がする。小さな、今で云へばスーツケースのやうな恰好をした黒塗の革鞄に、これ

も赤く大きく千金丹と書いたのを提げて居たと思ふ。せんだんの花のこぼれる南国の真夏の炎天の下を、かうした、当時の人の眼にはスマートな姿でゆつくり練り歩きながら、声をチノルに張上げて歌ふ文句は大凡そ次のやうなものであつた、「エーエ、ホンケーハーア、サンシューノーオー、コトヒーラーアヨ。(休)。マツシーマーア、カヂンーノーオー、センキーンーンタン」といふ風に全く同じ四拍子アンダンテの旋律を繰返しながら、だん〳〵に薬の効能書を歌つて行くのである。「その又薬の効能は、疝気疝癪胸痞へ」までは覚えてゐるがその先は忘れてしまつた。

子供等はこの薬売りの人間を、「ホンケ」と呼んで居た。「ホンケが来た〳〵」と云つて駆け出して行つては、この、「ホンケ」を取り巻いて、さうして口々に「ホンケ、オーセ、オーセ」と云つてねだつた。「オーセ」は「頂戴」といふ意味であるが、此処の「ホンケ」はこの薬売り自身を指すのではなくて、薬売りの配つて歩く広告のビラ紙のことである。この人間の「本家」が撒き歩くビラの「ホンケ」は、鼻紙を八つ断にしたのに粗末な木版で赤く印刷したものであつたが、その木版の絵が矢張蝙蝠傘をさして尻端折つた薬売りの「ホンケ」の姿を写したものであつた。一緒に印刷してあつた文字などは思出せない。子供等に取つてはこのビラ紙も「ホンケ」であり、それをくれる人間も「ホンケ」であつた訳である。兎に角、このビラ紙を貰ふのが当時の吾々子供には相当な喜びであつた。今になつて考へると実に不思議である。少年雑誌やお伽噺の本などといふものの未だ一つもなかつた時代では、こんな粗末な刷り物でも子供には珍しかつたのであらう。随分俗悪な木版刷であつたが、併し現代の子供の絵本のあくどい色刷などに比較して考へると寧ろ一種稚拙に鄙びた風趣のあるものであつたやうにも思はれる。

同じく昔の郷里の夏の情趣と結び付いて居る想ひ出の売声の中でも枇杷葉湯売りのそれなどは、今ではもう忘れてゐる人よりも知らぬ人が多いであらう。朱漆で塗つた地に黒漆で鴉の絵を描いたその下に烏丸枇杷葉湯と書いた一対の細長い箱を振り分けに肩にかついで、「ホンケー、カラスマル、ビハヨーオートー」を長く清らかに引いて、呼び歩いてゐたやうにも思ふし、又木陰などに荷を下して往来の人に呼びかけてゐたやうにも思ふ。その声が妙に涼しいやうでもあり、又暑いやうでもあつた。併しその枇杷葉湯が一体どんなものだか、味はつたことは勿論見たこともなかつた。その頃もう既に大衆性を亡なつてしまつて、たゞ僅に過去の惰性の名残を止めて居たのではないかと思はれる。東京で震災前迄は深川辺で見かけたことのあるあの定斎屋と同じやうなものであつたらしいが、併し枇杷葉湯のあの朱塗の荷函と清々しい呼声とには、あのガッチン〳〵の定斎屋よりも遙に多くの過去の夢と市井の詩とを包有してゐたやうな気がする。

生菓子を色々、四角で扁平な漆塗の箱に入れたのを肩にかけて、「カエチャウ、カエチャウ」と呼び歩くのは、多くは男の子で、さうして大概きまつて尻の切れた冷飯草履をはいてゐたやうな気がする。それが持つて来る菓子の中に「イガモチ」といふのがあつた。道明寺の餡入餅であつたがその外側に糯米のふかした粒がぽつぽつと並べて植付けてあつた。丁度栗のいがのやうだと云ふので、「いが餅」と名づけたものらしい。「カエチャウ」の意味は自分には分らない。この果敢ない行商の一人に頭蓋骨の異常に大きな福助のやうな子が居た。誰かが試に一銭銅貨と天保銭を出して、どちらでもいゝ方を取れと云つたら判然と天保銭を選んだといふ噂があつた。又、その生きてゐる頭蓋骨をとつくに何処かの病院に百円とかで売つてあるのだといふ話もあつた。

七味唐辛子を売り歩く男で、頭には高く尖つた円錐形の帽子を冠り、身には真赤な唐人服を纏ひ、さうして殆ど等身大の唐辛子の形をした張り抜きを紐で肩に吊して小脇にかゝへ、さうして「トーン、トーオン、トンガラシノコー(休)、ヒリヒリカライノガ、サンショノコー(休)、ゴマノコケシノコ、シャウガノコー(休)、トーントーントンガラシノコ」と四拍子の簡単な旋律を少しぼやけた中空なバリトンで唱ひ歩くのがゐた。その大きな真赤な張抜きの唐辛子の横腹の蓋をあけると中に七味唐辛子の倉庫があつたのである。この異風な物売りは或は明治以後の産物であつたかも知れない。

「お銀が作つた大もゝは」と呼び歩く楊梅売りのことは、前に書いたことがあるから略する。

蜆売りは、「スゞメガイホー」と呼び歩いた。牡蠣売りは昔は「カキヤゴー」と云つたものらしい、といふのは自分等の子供時代に大人から屢垣聞かされた狸の怪談のさま〴〵の中に、この動物が夜中に牡蠣売り

に化けて、「カキヤゴーカキヤゴー」と呼び歩くといふのがあつて、吾吾はよく夜道を歩きながらその狸の真似をするつもりで、「カキヤゴー」「カキヤゴー」と叫び歩き、さうして自分で自分の声におびえることによつて不思議な神秘の感覚を味わひ享楽したものであつた。

北の山奥から時々姿を現はして奇妙な物を売りありく老人がゐた。少しびつこで恐ろしく背の高い痩せこけた老翁であつたが、破れ手拭で頬冠りをした下からうす汚ない白髪がはみ出してゐたやうである。着物は完全な襤褸でそれに荒縄の帯を締めてゐたやうな気がする。大きい炭取位の大きさの竹籠を棒切れの先に引つかけたのを肩にかついで、跛を引き歩きながら、「丸葉柳は、山オコゼは」と少し舌のもつれるやうな低音で尻下がりのアクセントで呼びありくのであつた。舌がもつれるので、「山オコゼは」が「ヤバオゴゼバ」とも聞こえるやうな気がした。兎に角、この山男の身辺には何となく一種神秘の雰囲気が揺曳してゐるやうに思はれて、当時の悪太郎共も容易には接近し得なかつたやうである。自分もこの老いさらばへた山人に何とはなしに畏怖の念を懐いてゐたが、併しその「山オコゼ」と云ふのがどんなものだか知り度いといふ強い好奇心を永い間持ちつゞけてゐた。それでとう〳〵母にねだつて二つ三つの標本を買つて貰つた。それは、煙管貝のやうな恰好で全体灰色をした一種の巻貝であつて、長さはせいぜい五六分位であつたかと思ふ。勿論貝殻だけでなく活きた貝で、箱の中へ草と一緒に入れてやるとその草の葉末を蓑虫か何ぞのやうにのろのろ這ひ歩いた。海でなくて奥山にこんな貝がゐるといふのが如何にも不思議に思はれたが、その貝の棲息状態などに就いては誰も話してくれる人はなかつた。海の「オコゼ」は魚であるのに何故山の「オコゼ」が貝であるかも不可解であつた。

「山オコゼ」がどうして売り物になるか、又それを買つた人がどういふ目的にそれを使用するか、といふ疑問に対して聞き得たことを今ではぼんやりしか覚えて居ない。なんでも今日の所謂「マスコット」の役目をつとめるといふのであつたやうである。例へばこれを懐中してゐるとトラムプでも其の他の賭博でも必勝を期することが出来るといふのであつたらしい。勿論この効験は偶然の法則に支配されるのである。

「丸葉柳」の方はどんな物だか、何に使ふのか、それについては自分の記憶も知識も全然空白である。

売り声の亡びて行くのは何故であるか、その理由は自分には未だよく分らないが、併し、亡びて行くのは確かな事実らしい。

普通教育を受けた人間には、最早真昼間町中を大きな声を立てて歩くのが気恥かしくて出来なくなるのか、売り声で自分の存在を知らせるだけで、おとなしく買手の来るのを受動的に待つてゐるだけでは商売にならない世の中になつたのか、或は又行商といふこと自身がもう今の時代には相応はしくない経済機関になつて来たのか、或はそれ等の理由が共同作用をしてゐるのか、これはさう簡単な問題ではなささうである。それはいづれにしても今のうちにこれ等の亡び行く物売りの声を音譜にとるなり蓄音機のレコードにとるなり何等かの方法で記録し保存しておいて百年後の民俗学者や好事家に聞かせてやるのは、天然物や史蹟などの保存と同様に可なり有意義な仕事ではないかといふ気がする。国粋保存の気運の向いて来たらしい今の機会に、内務省だか文部省だか、何処か適当な政府の機関でさういふアルキーヴスを作つてはどうであらうか。ついそんな空想も思ひ浮べられるのである。

（出典・現代日本文學全集44（筑摩書房刊）寺田寅彦・森田草平・鈴木三重吉集）

解説

島田雅彦

レオナルド・ダ・ヴィンチの脳はポリフォニックに多方面に関心が及んでおり、よくぞ病気にならなかったものだと思う。左右一対の脳が考え出すことは無限のはずなのに、世の中は何と退屈な思考で満ちていることか。そこでレオナルドの手記みたいなものが近代日本にもあるかと探したら、寺田寅彦がいた。プリミティブな好奇心から対象観察を進める自然科学の目は文学と何ら変わりはない。凡庸な思考へ誘うのが文学なら、私は即刻、文学者を辞める。

寺田寅彦⊙Terada Torahiko
一八七八―一九三五　物理学者、随筆家。漱石の門下生のひとり。随筆の名手として知られ、科学者として森羅万象に興味を示すとともに、その語りくちは人間味溢れ日本文学史の系譜の中に独特の位置を占める。「柿の種」「俳句と地球物理」他。

島田雅彦⊙Shimada Masahiko
61年生。22歳でのデビュー以降、「文壇の貴公子」と呼ばれること二十年余り。皇太子妃の恋を描いた「彗星の住人」はじめ、問題意識と遊び心の高い作品を書いている。

旧作異聞

斎藤美奈子

斎藤美奈子 ⊙Saito Minako
56年生。文芸評論家。『文壇アイドル論』『誤読日記』他。

川端康成『雪国』といえば〈国境の長いトンネルを抜けると雪国であった〉である。知らない人はいない「ザ・日本文学」だ。

しかし、この『雪国』、何か変な気がしないだろうか。駒子や葉子がしゃべる日本語が、私にはしっくりとこない。たとえば冒頭近くのこんなやりとり。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしゅうございます。」
「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ。」
「弟が今度こちらに勤めさせていただいておりますのですってね。お世話様ですわ。」

とても山出しの娘とは思えない。麹町あたりの若奥さんか何かのよう。ここで話されているのは、そう、少し前の東京の山の手言葉なのである。そしてこのふたりだけではない、『雪国』の世界では土地の人たちすべてが流暢な東京言葉を話すのだ！

ご存じのように『雪国』は一種のリゾラバ（旅先でだけの恋人＝リゾートラバーの略です。死語だけど）小説だ。トンネルという異界への通路をくぐれば、そこはもうシャングリラ。主人公の島村は、土地のちょっといい女をナンパして疲れを癒そうとしている（だけの）都会の男。むろん妻子持ちである。いまは芸者の駒子とデキてるが、若い葉子も悪くないなあ……。「ったく、ろくでもない男だぜ」とだれしも思う。それでもこれが「ザ・日本文学」の座に君臨してきたのは〈大変音楽的な美しさと厳しさを持っている〉（伊藤整／新潮文庫の解説）と解されてきたからだ。『雪国』はストーリーではなく「美しい日本語」を味わう文学だったのだ。

しかし、視覚、嗅覚、触覚を刺激する巧みな表現に秀でた『雪国』は、聴覚的には信用できない。さっきの葉子と駅長さんの会話を土地の「標準語」に直してみよう。

「駅長さん、私らて。なじらね。」
「やいや、葉子さんらねっか。お帰りらかね。ばっかさーめなったれねー。」
「おじが今度おめさんげに勤めさしてもろてるがんらてね。お世話様らこて。」

はたして『雪国』の語り手は（または川端康成は）、こうした現地語は作品の叙情性を壊すと考えたのだろうか。それとも新潟弁などハナから耳に入っていなかった？　方言だと通じないから読者のために翻訳した？

いずれにしても、失礼な話である。語り手ないし島村の耳に駒子らの言葉は届いていなかったのだろう。テレビの音声を消した状態。または字幕のない外国語映画を見ている状態。姿は目に入っても、音声は聞こえても、彼女の言葉を彼は真剣に聞いていない。だからロパクの映像に頭の中で考えたアフレコがつく。島村にとっては駒子も葉子も雪国と同じ風景のひとつ。土地の言葉は邪魔なノイズだ。よって駒子は山間の温泉町の芸者というより、まるで東京の跳ねっ返りの女学生のような言葉を遣うのである。

「よくないわ。つらいから帰って頂戴。もう着る着物がないの。あんたのとこへ来る度に、お座敷着を変えたいけれど、すっかり種切れで、これお友達の借着なのよ。悪い子でしょう？」

「美しい日本語」だからこそだろう。『雪国』は言葉遊びにもよく使われてきた。上のせりふを齋藤孝が名古屋弁に訳している。

「いかんわ。つれゃで帰ってちょ。まあ着る着物があれせんのだわ。あんたのとこへ来る度に、お座敷着を変えてゃあんだけど、つるっと種が切れてまって、これも友達の借着なんだわ。わるい子でしょー？」（『文豪ナビ　川端康成』所収）

まーおもしろくないことはないけどね。ここは雪国。名古屋弁には何の必然性もない。同じ川端康成でも、『古都』の登場人物はみな京都弁で話している。必然性の高い言い回しならこうだろう。

「ようねーて。なんぎらすけ帰ってくんなせや。へえ着る着物がねーんらわ。なったに来る度に、お座敷着を変えたいろも、よっぱら種切れらすけ、このがん友達んしょの借着なんらて。わーり子らろー？」

こんな言葉を駒子は遣わなーい！　と思うでしょ。でも、本当はこうだったはずなのさ。こんな駒子を島村は愛せたか。愛せないならたいした男ではないということである。

『雪国』岩波文庫

いとう宅配

奥泉光、カフカで勝負

ヒカルがボケて、いとうがツッコむ――。芥川賞作家の奥泉光さん（49）とクリエイターとして多方面で活躍するいとうせいこうさん（44）による「文芸漫談」の単行本が先ごろ刊行された（Ⅱ写真）。文学の基礎を漫才形式で語る同書は、隔月刊文芸誌「早稲田文学」（05年5月号をもって一時休刊）での人気連載を単行本化したもの。刊行を記念して、東京・池袋のジュンク堂書店では両氏によるライブが行われた。

（森本翔子）

「文芸漫談」表紙＝集英社刊、定価1600円(税別)

いとうせいこう　どうですか？　奥泉さんの青春もしくは幼少時代の本屋さん。

奥泉光　「三一書店」というのがあってね。間口が二つあって、小さいほうで楽器を売ってるんです。

いとう　奥泉さんがフルート吹いちゃう原点なんですかね。

奥泉　そこで生まれて初めて楽器を買いました。

ウクレレです！

いとう　……また変わったところから入ってきますねえ。

奥泉　普通のギターが欲しかったんだけど、「まだ早い」と。

いとう　大きいから、小四じゃ扱いづらいしね。

奥泉　いや、値段が高かったらしくて。ウクレレは**980円**だったんです。

いとう　安いねえ！

奥泉　練習しましたよ、「**ブルーシャトウ**」とか。

いとう　小学四年生でしょ？

奥泉　なにしろグループサウンズ時代ですから。

いとう　「ですから」って、ウクレレじゃないですか！

小沢くんはリルケ

しかもグループじゃないし！

奥泉　グループに至りたかったんですよ。その第一歩として……

いとう　ウクレレなんだ（笑）。

奥泉　親父の伴奏しちゃったりね。「**今日の～仕事は～疲れた～♪**」。

いとう　なんでそんなもの、ウクレレで明るくやってるんですか。

奥泉　そういう本屋でした。

いとう　本の思い出がひとつもないよ（笑）。

奥泉　いえ、グループサウンズをやりつつ教養にも目覚めたんです。

いとう　ほうほう。

奥泉　近所の小沢くんって友達が、「ぼくは三一書店にある棚の本を読破するんだ！」と、リルケなんかを読むんですよ。

いとう　ませてるねえ。

奥泉　「リルケか。じゃあ**こっちはカフカだ！**」みたいなね。

いとう　よくわかんないカードの出しあいが！

奥泉　**三文字で**勝負しようかなと。

いとう　片仮名でね（笑）。

◇　◇

いとう　ぼくは宅配ですね。

奥泉　んっ!?

いとう　「小学三年生」とか、本屋さんが毎月届けてくれたでしょ。

奥泉　そうですか？

いとう　本は「運ばれてくるマレビト的なもの」っていう印象なんです。

奥泉　**富山の薬売り**みたいな（笑）。

いとう　ふろくが輪ゴムでぐるぐる巻きにしてあって、それを外すのが楽しみでね。

奥泉　ぼくらの本もふろく付ければよかったですね。

いとう　ええっ、どんな!?

奥泉　**日光写真**とか。

いとう　文学と関係ないじゃないですか！

奥泉　3Dの眼鏡とか、恐竜図鑑とか。

いとう　おもしろいですけど、集英社はやろうとしないでしょ、それ。

集英社刊『文芸漫談』

奥泉　『グランド・ミステリー』を出したときにね、自分の本がどのように売れてるか気になって、個人的に書店営業をおこなったんですよ。

いとう　なにするんですか？

奥泉　文芸担当っぽいひとに話しかけるんです。二軒に一軒は担当者が……**こほんでいませんでしたけど、**

いとう　断られてんだ（笑）。

奥泉　ちゃんと相手してくれたひともいましたよ。「あの、すみません」「なんですか」「**奥泉という者ですが**、この本よろしくね」って。

いとう　こども預けに行くんじゃないんだから。

奥泉　在庫にサインとか頼まれるともう大喜び。サインしちゃうと**もう返本できないでしょ。**

いとう　中古になっちゃうんだ！

奥泉　あとは「これ、もう二冊しかないですね……**ぼくが注文**しましょうか？」とか。

いとう　伝票も自分で書いちゃったり。

奥泉　でも、後日見に行くと、入ってないんです。

いとう　**本人じゃない**と思われたんですよ（笑）。

奥泉　だいたいみなさん信用してましたよ。

いとう　さっきあからさまな嘘つかれてたじゃん！「**ごはんに行ってる**」って！

奥泉　でも、そのころ高村薫の『レディ・ジョーカー』が出てね、そっちのお客さんばっかりなんです。

油断すると、首のあたりにバカ前線が停滞。熊野を中心に朝から快晴。いとうや奥泉も午後はなぜか突きやすくなる。詳しくは『文芸漫談』第四章「バカの天気」174頁参照。

いとう　哀しいですねえ。

奥泉　そういうひとには、横から話しかけたりして。「あの、失礼ですけど」。

いとう　えっ!?

奥泉　「その横にある奥泉光の本も、同じくらいおもしろいですよ」。

いとう　怪しまれませんか？

奥泉　おばさんとかだと返事してくれるんですよ、「あら、そうなの？」とか。「ええ、本当です。なにせ**本人が**言ってますから」（笑）。

いとう　迷惑な話ですねえ。みんなが毎日やったら書店ぐちゃぐちゃですよ。「あの人類学の棚の前にいるの、**レヴィ＝ストロースじゃねえの!?**」とか（笑）。

奥泉　毎日来るなら、いっそ小屋たてて住んじゃえば。

いとう　そこで寝起きしちゃって。「**レヴィ＝ストロースここに眠る**」みたいな。

◇　◇

奥泉　そんなわけで、奥泉光の新刊『モーダルな事象』、文藝春秋社の意気込みも伝わる一九五〇円、お買い得です。

いとう　いや、これは『文芸漫談』の宣伝ですから。集英社だし。

新しい読者の方々、はじめまして（そしてごく少数の、これまで雑誌「早稲田文学」を読んできてくださったみなさん、ごぶさたしました）。1891 年に創刊された文芸雑誌「早稲田文学」のフリーペーパー版、「WB」1 号をお届けします。手にとってくださってありがとうございました。この 20 ページには、今の日本語文化圏で言葉をめぐって活躍したり悪戦苦闘したりしている「言葉つかい」たちの、様々な試みや声が詰まっています。ブンガクなんてタイトルは固く感じられるかもしれません。でも、電車の中で、カフェで、あるいは学校や職場や家で、気になったページを眺めて「こんなふうに世界を見ているひともいるんだ」くらいに思ってもらえれば幸いです。「ブンガクをちょっと日常に」、それがWBの願いです（lc）。

雑誌「早稲田文学」の過去の刊行物や歴史、フリーペーパー化の経緯などに興味を持ってくださった方がいましたら、小誌編集室のサイトにお立ちよりください（www.bungaku.net/wasebun）。

［早稲田文学］

2005 年11月15日発行（隔月刊）

Shock!! Issue vol.01

WASEDA bungaku

Published by　土田健次郎

Edited by　芳川泰久（Editor in Chief）
青山南　森本翔子
江中直紀　辛由美
貝澤哉　中村太一
十重田裕一　村田知嘉子
三田誠広　松田茜
山本浩司　伊藤慶祐
佐伯悠

朴文順
市川真人（Concept & Direction）

Art Direction　奥定泰之
Photograph　松蔭浩之

編集・発行　早稲田文学会／早稲田文学編集室
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-7-10
TEL/FAX 03-3200-7960
Mail　wbinfo@bungaku.net

印刷　（株）早稲田大学メディアミックス
169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-1-7
TEL　03-3203-3308
FAX　03-3202-5935

日本語による文学・哲学・芸術表現の普及をめざすフリーペーパー「WB」では、主旨に賛同・応援してくださる個人や企業のみなさまからの、広告出稿や配布場所提供などによるご助力を求めています。関心をお持ちくださったかたは、小誌編集室（上記）までご一報いただければさいわいです。

次号より、読者コーナーを設置の予定です。小誌の感想やご意見などを、小誌編集室あてにメールまたは郵便にてお寄せください。

Back Issues of the WASEDA BUNGAKU

中原　もっと誇りをもって書きたいですよ！　書けるものなら。
モブ　とつぜん真顔に（笑）。じゃあ、めちゃくちゃ安いところでわざと書いてみるとか？　ワセブン、原稿料五百円だったよな？
中原　それは、誇りとは言えません（笑）。

（「ハダカノサッカ」中原昌也＋モブ・ノリオ）

2005-5　現在と未来をめぐって

〈対談〉　「かろうじて」の文学　古井由吉×寺田博
〈小説〉　奇妙な入試情景　大西巨人
〈評論〉　批評の未来　The Future of Criticism
フレドリック・ジェイムソン
ハリー・ハルトゥーニアン／ W.J.T. ミッチェル

〈小特集〉 博打と文学 2
麻雀座談誌上採録　まあじゃん放銃記
荒井晴彦　稲川方人　植島啓司　樋口泰人

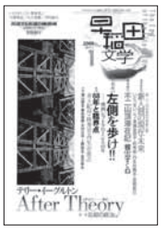
古本屋も映画館も
ハリーを追い出しにかかっていた
ずっとむかしから
彼にはそんな予感があった
もしパチンコに出会わなかったら
いったいどうやって
時間を潰したらいいのか、判らないまま
ハリー・ポッターは途方に暮れて、
道端で泣いていたかも知れない

「ハリー・ポッターと二つのエレジー」松本圭二）

2005-3　博打と文学

『三日間（スリーデイズ）』一感傷的博打論　山岡頼弘
死ぬことも忘れていた　横田創／色川武大と中華屋　大久秀憲

〈文芸漫談・第一部最終回〉
「市営グラウンドの駐車場」いとうせいこう＋奥泉光
〈小説〉　ゲ！　向井豊昭
絵の空　立花種久



絃　匿名批評的なレベルの批評は、いまや「2 ちゃんねる」でじゅうぶんなんですよ。……たまにいいのあるよ。三行くらいで。おれなんかも反省しちゃったりすることあるもん。
斎藤　三行で。瞬間芸ですよね。
絃　長いと威力がない。もう、それでいいんじゃないのかな。

（新人賞選考座談会）

2005-1　新人賞の現在・未来

〈新人賞選考座談会〉　いとうせいこう／斎藤美奈子／絃秀実
丹生谷貴志／渡部直己

After Theory　第一章　忘却の政治
テリー・イーグルトン　訳・解題　北野圭介

〈小特集〉 左側を歩け !!
【鼎談】 井土紀州・絃秀実・丹生谷貴志
【評論】 上野昂志

饒舌な写真というものを、このとき私ははじめて見たのだった。饒舌なのにひそやかである。……一番心に引っかかったのはセバスチャン・サルガドの写真だった。好きだというのでも、共感を持つというのでもない。モノクロ写真が、見えない手を伸ばしてきてこちら側の胸ぐらをつかむ。

「物語の手段として」角田光代）

2004-9　写真×文章

〈写真は語れない、か?〉　モブ・ノリオ／堀江敏幸／角田光代
横田創／伊藤俊治／上野昂志
〈言葉という異次元〉　ホンマタカシ／島尾伸三／北島敬三
マリオ・A／首藤幹夫

「芸術の終り」か、「歴史の終り」か?
フレドリック・ジェイムソン
大橋洋一・河野真太郎　訳

われわれはこういうことも踏まえないと、今は小説の時代じゃないから、小説を阻害するもの、小説を潰すような新機種に流れていくと思うんです。トヨタとか日産だとかそんなものは、小説の敵だと言いたいんです。それをその意識のまま小説に使っちゃうと、それは小説にならなくなる……

「小説を阻害するもの」中上健次）

2004-7　小説を阻害するもの

〈新連載〉　コピーライトについての試論　大杉重男
私をブンガクに連れてって　芳川泰久
それでも小説はここがイケてる　渡部直己

〈対談〉　わたくしは生まれてから「ひとの悪口はいうまい」と思って育っている人間なのですけれども……
蓮實重彦×渡部直己

私は自分が日本で文学批評をやってきた経験からいうのですが、近代文学は 1980 年代に終ったという実感があります。いわゆるバブル、消費社会、ポストモダンといわれた時期です。……小説よりも現代思想を読んだ人が多いのです。いいかえれば、それまでのように、文学が先端的な意味をもたなくなっていた。

「近代文学の終り」柄谷行人）

2004-5　近代文学の終り

〈新連載〉 美学・労働・イデオロギー　池田雄一
更新期の文学　大塚英志

〈アンケート〉
ブンガクシャは派兵と改憲についてどう考えるのか
鶴見俊輔・飯島耕一・宮内勝典・蓮實重彦・天沢退二郎
笙野頼子・いとうせいこう・星野智幸・渡部直己……

◉各号定価 720 円、冊数分の定価のほか、送料の実費を頂戴します。
◉ご注文は、住所、氏名、電話番号、希望の号を明記のうえ、右奥付の「早稲田文学編集室」まで。
メールでの注文も可能です。wbshop@bungaku.net
◉ 2000 年以前の号は編集室のウェブ（www.bungaku.net/wasebun）にて検索できます。
◉ 2004 年 11 月号は完売しました。

リテラリー・ゴシック［01］

高　原　英　理

高原英理 ⊙Takahara Eiri

59年生。主に評論家。美と憧憬の理論『少女領域』『無垢の力』の後、『ゴシックハート』を著してゴスの暗黒卿となる。合言葉は「残酷・耽美・可憐」。

詩集『黒衣聖母』（1921）序文で自らの詩形を「ゴスィック・ローマン詩體（したい）」と呼んだ詩人日夏耿之介の文業以後、ともあれ「ゴシックロマンス」という暗く黒く晦渋な怪奇文学が海彼にあることは、文学にかかわる人々の一部に認知されていたはずだが、実際にいかなるものか、ゴシックロマンスそもそもの開祖であるホレス・ウォルポール作の“The Castle of Otranto”が平井呈一によって『オトラント城綺譚』として翻訳されるまで、英文学者ならぬ諸人の知る由もなかった。だがそれが果たされたのは1970年のことであり、翻訳にもせよわれわれが「実物」に触れえたのはたかだか三十数年前に過ぎない。ちなみに“The Castle of Otranto”原典の刊行は1764年、ゴシックロマンスは西欧で18世紀半ばに興り19世紀半ばあたりに一旦は廃ったジャンルである。より詳しくは自著『ゴシックハート』の第一章に目を通していただこう。

では翻訳や研究でない、日本文学へのゴシックの反映はどこからか、むろん日夏の著作がその嚆矢ではあるが後を継ぐ作家がおらず、ならばそれとは切れたところで敗戦後日本文学の創作から捜すなら、どうも倉橋由美子の『聖少女』（1965）あたりではないかと私は考える。ここに記された「モンク」という喫茶店の描写はもはや知識の移入でなく、当人たちの自主的な趣味の展開としてゴシックな空間を構築していた。ここで引用する余裕はないので、原本にあたるか、自著『少女領域』の217～9ページでの引用をごらんいただきたい。またそれは60年代「異端」と呼ばれた「澁澤龍彦系」コレクションの実践でもある。

むろんそれを「ゴス」と呼ぶ意識はまだなかった。しかし歴史は過去を位置づける。28年を隔てて2002年、山崎まどかの「乙女カルチャー入門」書、『オードリーとフランソワーズ』に再発見された倉橋の『聖少女』は「ゴスという乙女道」の章に語られ、ゴシックカルチャーの先駆として、あるべき位置を見出された。「ゴスロリ」というのも、思えばそこから伸びる支流である。しかし、澁澤も読まないファッションのみのゴスを私はあまり推奨しない。

『聖少女』新潮文庫

きっかけは何でもよい、いくらかでもゴスに気をとられた方は、その奥にほの見える城の暗闇を彷徨っていただきたい。そしてそもそもゴシックとは文学によって意味づけられてきたものであることを忘れないでいただきたい。

さて、ここまでは前提である。以後、ゴシックなものに関して、文学限定で言及してゆこうと思う。

ソシュールはここが出る

陽気で利発な初心者のための現代思想入門①

渡部直己 Watanabe Naomi

たとえば、信号機の「青」は実際には緑色。オーソドックスな三色信号でも、押しボタン式のランプでも、あれはほとんど緑なのに何故「青」信号と呼ばれるのか？　変だと思う人は大勢いるらしく、以前、ＮＨＫの番組だったか、そんな質問にどこかのマヌケな学者がしたり顔で答えていわく。日本語では古来、「青」は幅広い色彩をふくむ言葉としてあるのだ、と。野菜一般を「青物」、白馬のことを「青馬」、「青い山脈」なんて歌もありますとか、だいたいそんな説明がなされていたわけだけれど、ならば、英語のｂｌｕｅにも同程度の幅があるのか、あっちの信号もほとんど緑色だけど、と、反射的にそう考えた人は筋が良い、というのが今回の話。その筋を、「言語の中には差異しかない」という命題のもとに見事に理論化し言語学を一新、さらに、戦後の「構造主義」全般に多大な影響を与えた人が、フェルディナン・ソシュール（一八五七～一九一三年）である。

言語を典型とする「記号（シーニュ）」は「記号表現（シニフィアン）」と「記号内容（シニフィエ）」の両面をもつ。大雑把に言えば、「意味する形」と「意味される概念」の結びつきがひとつの「記号」を構成するわけで、日本語という記号体系内では、［ｎｅｋｏ］という音の連なりがシニフィアン（以下ＳＡ）、これによって喚起される［猫］の概念がシニフィエ（以下ＳＥ）ということになる。このとき、①ＳＡとＳＥの結合には何ら必然性がないこと（あったら、世界中の人間がその生き物を［ｎｅｋｏ］と呼ぶ）、②にもかかわらず一体系内で結合は必然化され、③その必然化を支えるものこそ、ＳＡ相互の示差性である、というのがソシュールのミソとなるのだけれど、これを、やはり一個の意味体系としてある三色信号機にあてはめてみると、「青」「黄」「赤」の三色がＳＡとなり、それぞれ「進め」「注意」「止まれ」というＳＥを、上記①②をみたしてもつことになる。そこで、先のマヌケ学者にはたぶん生涯無縁な③がポイントとなってくるわけで、かりに、赤信号で立ち止まったあなたが頃合いと思う次の瞬間、「青」信号のガラスが壊れていて、そこに白色光が点ったとすればどうするか？　当然、渡るだろう。このとき、その当然の意味を生み出しているＳＡの本質は「青」という色そのものではなく、じつは、その色が「黄」

女の子の文学（ファッション）①

横田創

横田創 ⊙ Yokota Hajime
70年生。三島賞候補作『裸のカフェ』を筆頭に、クールな小説を書いている。小説や映画を愛しつつ、音楽やファッションも忘れない35歳。

あのころはいつもお祭りだった。家を出て通りを横切れば、もう夢中になれたし、何もかも美しくて、とくに夜はそうだったから、死ぬほど疲れて帰ってきてもまだ何か起こらないかしら、火事にでもならないかしら、家に赤ん坊でも生まれないかしらと願っていた、あるいはいっそのといきなり夜が明けて人びとがみな通りに出てくればよいのに、そしてそのまま歩きに歩きつづけて牧場まで、丘の向こうにまで、行ければいいのに。

（チェーザレ・パヴェーゼ『美しい夏』訳・河島英昭／集英社版　世界の文学14）

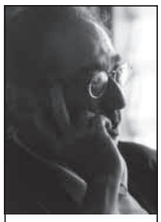
日々の生活の、仕事の、勉強の、気晴らしでも骨休めでも気休めでもなくPartyをしよう。jamiroquaiの“dynamite”をRECOfanで試聴して迷うことなく税込み1,554円で、soulでhipでcuteな音楽を手に入れ、高校生または中学生のころから使っているぼろぼろのＣＤウォークマンで回して、FRESHNESS BURGERでWサイズ、バケツみたいなマグカップでコーヒーを飲みながら友だちをメールで誘ってPartyをしよう。今年の夏はpunkでrockなＴシャツにフレアの花柄スカート、ごついウエスタン・ブーツかぺったんこなミュールを履く**ベッキー**や**カエラちゃん**みたいなハーフ系？　カラフルな古着ファッションが流行っていたけど、この秋はもっとぐぐっと根本的に古着でヴィクトリアン調、Louis Vuittonのデザイナーもしている**Marc Jacobs**がいつか雑誌で言っていたけど、ブラウスって言葉、なんかいいよね？　レトロでてろてろな感じがして、しかも柔らかそうで、レースやフリルでふわふわなのに腰のあたりはシャープなシルエットの、もとはと言えばアントワープ系の**Veronique Branquinho**が90年代から打ち出していた修道院か寄宿舎みたいなブラウスをより古風にして、よりpunkでrockな革パンやデニムに合わせたりしたら最高じゃない？　だからその服を着るためにPartyをしよう。結婚式とか卒業式とか歓迎会とか、式とか会とかお祝い事におんぶに抱っこになるんじゃなくて、用もないのに「用」を作るためにPartyをしよう。ていうかPartyだけが用であると、他にすることなんてないと思って、とりあえず、ねえ、身近なところでPartyをしよう、イタリア人のように？　小説のように？　『**美しい夏**』の**アメーリアとジーニア**のように。きのうは友だちと居酒屋でプチ・パーティーをしたから今日は一人で卵かけごはんを食べるんじゃなくて、わざわざ別の場所で別の友だちと別のかたちで会う約束なんてしないで、だいすきだったら同じカフェで同じメニューを同じ友だちと食べてもかまわないどころか、なんだったら一緒の部屋にみんなで住んでしまって、仕事から、学校から、帰ってくるたびPartyをしよう。誰かに会うことがいつもそうして“Party”になるなら、その緊張感が、距離が、言葉があなたをいまよりずっとおしゃれにするはず。だから、明日といわず今日、今晩？　朝まで？　Partyをしよう。

『世界の文学　パヴェーゼ』集英社

でも「赤」でもないことを示している点にある。もうお分かりでしょう？　だから、「青」信号の実際の色が緑でも構わぬという話になるわけで、「黄」や「赤」についても事情は同じ。日本語における［ｎｅｋｏ］という音の連なりもしかり。これらが示しているのもやはり、他のすべてのＳＡとは異なることなのだ。この点を、チェスの駒の形（ＳＡ）とその動き（ＳＥ）で説明するソシュールを日本風に応用すれば、「香車」の駒が一枚なくなった状態で将棋を指すに、何も、「香車」駒に似せた厚紙など作る必要はない。死んだゴキブリの子供を使っても、ちゃんと用が足りるというのが、ソシュールの鮮かな教えとなるのだった。

さて、こうした教えが「何処に出るか？」というと、もちろん「人生に出る」わけで、右を、〈現象Ａと、これがふくむ価値ａ〉と捕らえ直して思い切り敷衍すると、あれこれ有益な覚悟を手に入れることが出来る。現象Ａと価値ａとを結びつけるのは、現象Ａそのものではなく、じつは、現象Ａと現象Ｂ（その他、Ｃ、Ｄ、Ｅ……）との間の差異にほかならぬこと（上記では、現象Ａ「青」、価値ａ「進め」と敷衍しうる）。たとえば、あなたという現象にともなう価値（個性、同一性）は、他の人々（現象Ｂ、Ｃ、Ｄ…）との関係から生ずるのだとすれば？　同様にして、現象Ａに、「女」「子供」「日本」などを代入してみるとよい。この世に、「男」「大人」「他国」が存在しなかったら、「女らしさ」「子供らしさ」「日本的なもの」などが、それぞれの価値としてどうして問題になりえようか、と、そう考える一瞬、少なくとも、あなたは他愛ないナルシシズムからスッキリ解放されるだろう。あるいは、「自分探し」などという甘ったれた苦しみからも。「自分」など、他人たちとの関係（それが差異である）のなかで勝手にいくらでも作り替えられる！　そんな風通しの良い覚悟のうちにソシュールを読み替えれば、グッと元気になるはずだ。

ちなみに、我が国の全共闘時代のバイブルと謳われた吉本隆明『言語にとって美とはなにか』（一九六五年）の冒頭、初めて海をみた原始狩猟人が「う」と声を立て、それが「海」という言葉になった（!!）と記されている。これがバイブルなのだから、あの運動がコケて、愚にもつかぬ感傷家ばかりをゴロゴロいまに生み残してしまったことも、まあ、仕方ない成り行きではあるのだけれど……。



渡部直己 ⊙ Watanabe Naomi
52年生。小説や現代思想はもちろん、『がきデカ』からサッカーまでを鋭く斬る批評家。「メルトダウンする文学への九通の手紙」が近刊予定。

『一般言語学講義』岩波書店

photo by Hiroyuki Matsukage

福永信の京風対談

三十三歳初めての筆談編　［ゲスト］長嶋有（小説家）

福永◉きみとはいずれ筆談すると思っていた。／**長嶋**◉フフフ。そうなんですか。／**福永**◉そうさ。／**長嶋**◉二泊三日の大阪京都行は若干ハードだったナァ。／**福永**◉そう？　~~「プールサイドの死」にはびっくりしたけど。あれは読み終えると言葉を失う。~~／**長嶋**◉「プールサイドの死」をそんなに云々されるとは僕もオドロキだよ。これから先も、多分ないことだろうね。／**福永**◉そう？　小学生のときのきみには是非会ってみたいものだ。きっとたいそうかわいいだろう。／**長嶋**◉そうそう、あれは小学生の時の作品なんですよ。ってことを断り書きしなかったんだけど。しかしさっきから怪人二十面相みたいな言葉づかいだね。／**福永**◉小学生のとき読んでたからかな。まいったな。僕は早熟じゃなくてね。しかし周囲には沢山いるわけ、「プールサイドの死」を書きそうな連中が。そういう友人達がうらやましくてシットしたものです。早熟じゃないことには早く気づいたんだけど。／**長嶋**◉筆「談」っぽくなってきた。沢山はいないんだナ（笑）。早熟というのかな（プールサイド）は。／**福永**◉ちがうね。いや、ちがうかな。／**長嶋**◉ねえ。←同意の。アレ（プール）の話もいいけどマッチ箱も話そうよ。アレ（マッチ）は本以上にモノっぽいですね。／**福永**◉本を燃やすものだしね。つまり、ないページは燃えないということを思ったんだ。ないページに書かれた内容はマッチ箱の表面に印刷されているんだけど、考えてみたらマッチ箱は燃えるわけで、ないページの内容なんて、どこにも書けないことに気づいたよ。まったく情けない。早熟じゃないからかな。／**長嶋**◉なるほど（←とりあえず）。いきなり半ページ以上書いたね。それでいて怪人二十面相ぼさもブレない。早熟でないとしたら晩成型なのだろうね。なんか語尾がひきずられてきた。（あと十分くらいか？）／**福永**◉そのとおり。カツオと同じだ。僕はね、自分の三十代、四十代、五十代には全く興味ないんだけど、それ以降の年齢の自分が何を思うか、気になって仕方ない。自分がいったいどんな作物を書くか、ね。八十九で『死霊』十章を書くことは決めている。九十で柴崎さんと『別れる理由』について対談することのしょうだくも得ている。しかし、カツオはおじいさんにはなれないだろうから、かわいそうだ。ところで柴崎さんとは大阪で会ったんだろう？／**長嶋**◉あったあった。って君も同席したじゃないか。柴崎さんに車内で貸していた『別れる理由』三冊の重そうな感じは、今回一番の思い出さ。さて、そろそろホームに行かなくてはね。／**福永**◉そうだ、そうだ、そうだ。とうとうホームに来た。お別れだ。左手が赤いな。／**長嶋**◉ハハハ。本当だ。ではお別れの握手は右手で行うとしようか。／**福永**◉本当にギリギリまでありがとう。一九時四六分東京行のぞみ28だ。／**長嶋**◉ではサラバサラバ!!　さっきの店、なんでアラーム※を誰もとめなかったんだろう……。※ずっと鳴ってた。

筆談を終えて

長嶋有氏が関西方面に来る機会があり、帰りに京都に（もう一度）途中下車してもらい、筆談した。一時間ほどしかなく、プラットホームで続きを書き、乗車直前まで続けられた。文中の「プールサイドの死」は、彼の最新著作『いろんな気持ちが本当の気持ち』収録の短編（?）のこと、マッチとは岡山県立美術館の企画で僕がデザインした小さなマッチ箱のことで、僕には『あっぷあっぷ』という小さな本があるのだが、その九七頁と九八頁のあいだのエピソードを書き込んだのである（十個ほど余ってるのであげます。ハガキにあっぷっぷ!　と大きく書いて、早稲田文学宛てに送ってください）。また「柴崎さん」とは、柴崎友香氏である。前述の「機会」とは、彼女と長嶋氏の対談のことで、これは http://www.log-osaka.jp で全文読める。なお、長嶋氏の左手が赤いのは、その日大阪で行われたサイン本作りの際、手形を求められたためである。筆談は京都駅地下で飯を食いながら行われたが、原稿用紙を前に終始無言で文字を書き、交換し、ときおり写真を撮り合う男二人に、周囲の客は首をかしげていた。

長嶋有 ⊙ Nagashima Yu

72年生。作家。「サイドカーに犬」で文學界新人賞受賞「猛スピードで母は」で芥川賞受賞。コラムニスト「ブルボン小林（ぶるぼん・こばやし）」、俳人「長嶋肩甲（ながしま・けんこう）」としても執筆活動中。「ジャージの二人」「パラレル」他。

福永信 ⊙ Fukunaga Shin

72年生。作家。「読み終えて」でリトルモア - ストリートノベル大賞受賞。『あっぷあっぷ』は画家村瀬恭子との往復書簡的なコラボレーションを経てまとめあげられた。『アクロバット前夜』他。

ハイブリッド・クリティック①
斬首の光景

大杉重男 Osugi Shigeo

私がこれまでに見た最も印象的な斬首の光景は、2001年に見たリヒャルト・シュトラウス作曲の楽劇『サロメ』の舞台である（ドイツ・ザクセン＝アンハルト歌劇場来日公演、オーチャードホール）。サロメ役のラッパライネンというソプラノは元ミス・カリフォルニアという美貌とプロポーション（後者は特にオペラでは貴重なのだが）を生かして、終幕に一糸纏わぬ全裸となり、ヨカナーンの首（もちろん人形）を汗の光る豊満な胸にかき抱いて野獣のように絶叫咆哮した。通常オペラでは舞台と観客の間にオーケストラがあるのだが、この上演ではオーケストラが舞台の背後に回り、歌手と観客の距離を縮めたことで効果を上げていた。かなり間近な席に座っていた私は、予期せぬその迫力に圧倒され、鳥肌が立つような戦慄すら覚えたが、会場は上品な客が多かったのか、カーテンコールもあまり盛り上がらず（近くにいた白髪の老夫婦などは明らかに不快そうであった）、なんとなくラッパライネンの熱演に気の毒な気がした。とはいえ見ている人はいるもので、この舞台については音楽評論家の許光俊が賞賛しているのを後で読んで我が意を得た気がした。最近翻訳されたジュリア・クリステヴァの『斬首の光景』によれば、ギリシア・ユダヤ文化圏において斬首の表象は去勢と浄化の象徴的・想像的表現であると言う。とするならラッパライネンの演じた『サロメ』はその伝統に忠実な正統的「芸術」表現だったということになるが、あまりに正統的であるために単なる「エロ」や「ストリップ」と区別がつかなくなっているところが面白かったように思う。それを喜ぶことはアイロニカルな楽しみ方なのかもしれないが、しかしこうしたものが当たり前に上演されるようになれば（許氏によれば今年もラッパライネンは来日して『サロメ』を演じたが、規制があったのか（？）トップレスにとどまっていたらしい）、日本も文化国家として成熟したと言えるのかもしれない。

去年イラクで日本人旅行者がテロリストに人質にされた挙句に斬首され、その映像がネットを通じて全世界に配信されたというニュースを聞いた時、私が真っ先に想起したのも、このヨカナーンの首を抱いたサロメの姿だった。両者の間に何か共通点があるというのではない。そもそも私はその斬首映像を見ていない。それはテロリストのウェブサイトから容易にダウンロードできたが、見る気になれなかった。テロリストの宣伝に荷担することになるから？　死者に対する冒涜だから？　グロテスクな映像に関心がないから？　いずれにしろこのニュースは私の中の『サロメ』の夢を打ち破り、私たちが斬首が去勢にも浄化にもつながらない世界に生きていることを実感させた。三島由紀夫の首はまだ辛うじて美学的言説の対象でありえたかもしれないが、「酒鬼薔薇聖斗」の突きつけた首に対して私たちは「どうして人を殺してはいけないのか」というあまりにもベタなテーマ設定で無償の饒舌を戦わせることしかできなかったし、イラクの斬首映像には発する言葉もなかった。クリステヴァは「ラカンを敷衍するならば、想像界と象徴界から消し去られたものは、現実のなかにふたたび現れる恐れがあ」り、「その逆に、象徴的、想像的な横溢こそが、現実の行為への移行の誘惑をうち砕くチャンスをもつことができる」と、ギロチンに罪悪感と自尊心を持つフランス人に対し斬首を表象する芸術が果たす政治的な役割を私たちに教えてくれる。日本は斬首の伝統ではフランスに引けをとらないはずだが、斬首の表象は「横溢」どころか枯渇の感がある。フランスと違って日本では「王」の首を斬っていないからかもしれない。日本では「クビキリ」はあくまで「ハラキリ」の付随物であり、斬られるのは家来ばかりである。とすれば、せめて象徴的・想像的にでももっと我々は「王」の首を斬るべきではないか。

「斬首の光景」みすず書房

大杉重男 ⊙Osugi Shigeo
65年生。文芸批評家、のつもりだが、あちこちで喧嘩しすぎて書くところがなくなりつつある。しかし妥協しないで書きたいことを書くつもりだ。

翼賛下の批評1

大塚英志 Otsuka Eiji

「戦時下」をとうに越えて「翼賛下」である現在の「文学」について書こうと思って、一度は別の原稿を渡したが、考えてみれば文学が翼賛化するという自明のことについて記すことは全くの無駄だと思えてきた。文学がいかに翼賛化しようとも、もはや文学に人々を動員する力が絶望的なまでにない以上、それを批評する意味さえない。何年ぶりかの人事異動で文芸出版に関わることになった知人の編集者は「文芸誌はもはや尖閣諸島である」という、ぼくの「不良債権としての文学」というフレーズより更に身も蓋もない感想を述べたが、それはこの数年で耳にしたうちでは最も正確に「文学」の現在を批評している。つまり、既にそこに「ない」ものを「ある」と言い張るためにただ費やされる徒労の質と、しかも「ない」ものを「ある」ということでそこに「ある」ことになってしまうのは「島」や「文学」ではなく、ひどくさもしくいじましい「日本」であるという点に於いて、なるほど「文学」は「尖閣諸島」でしかない。そう考えると、石原慎太郎都知事が尖閣諸島に執着する理由もひどくわかり易い。存在しない「文学」と存在しない「尖閣諸島」の双方によって「石原慎太郎的なるもの」は自らの存在証明をしているのであって、それがニヒリズムでも何でもないところが、更にこの国の「文学」及び「政治」と正確に呼応している。

しかし必要なのは動員力のない翼賛下の文学について何事かを語ることではない。「動員」の装置としては「文学」よりも「映画」や「アニメ」や「まんが」や「写真」が有効だという判断は先の戦時下／翼賛下にとうになされたことだ。なるほど、翼賛下のライトノベルズ作家、太宰治のような「活躍」はあるが、転向した作家が国策映画の脚本の仕事を恵んでもらう様を描いた中野重治「空想家とシナリオ」のモデルではないかとさえ思えてくる、翼賛下にプロレタリア詩人から

たのしい革命①

絓秀実 Suga Hidemi

「日々是革命」を銘としたいと思うが、もちろんうまくはいかない。「趣味＝革命」程度である。しかし、革命のきっかけは日常ゴロゴロころがっている。毛沢東が言ったように、「革命無罪」は普遍的な真理だろう。この連載では、革命などかつてなかったし、これからもないだろうと安心しきっている馬鹿な輩を少しでも威嚇すべく、誰もが決起できる「楽しい」革命の端緒を見出すレポートをしてみたい。

いささか旧聞に属するが、大事な問題だと思うので記しておく。今年の4月14日、早稲田の小野講堂で5、60人ほどを集めた集会が開かれた。直接には、昨年の或るつまらぬ出来事から無期停学処分を受けた学生K君（当時はすでに処分解除）の問題をめぐっているが、より一般的には、映画『LEFT　ALONE』（井土紀州監督）の背景にもある2001年の早大サークル部室移転阻止闘争以降、露骨になった監視／管理型の大学のありかたに対する抗議を企図した討論集会である。

その集会で奇怪な光景があったと、『LEFT　ALONE』の出演者でもある花咲政之輔から聞いた。その集会には、学校職員が「スパイ」として潜入（傍聴？）していて、それを知った花咲ともう一人が「スパイは出て行け」と外に出そうとした。それに対して、主催者でパネリストの一人（早大教員）が制止し、「そういう考えは古い。彼にも聞く権利がある」と言ったのだという。しかし確かに、この教員の考えは「新らしい」。果たして、「スパイ」に聞く権利はあるのか。もしそうだとしたら、この集会は抗議先の学校当局との暗黙のコンセンサスの上でなされた集会ということになるだろう。もちろん「スパイ」を排除してしまったら、後々、学校当局と面倒なことになるという配慮もあろうが、それならそれで別の対応があったはずだ。

ところで、この集会には、実は私も出演交渉を受けていた。それも、集会の第一の当事者であるK君からである。私は、この種の集会に要請を受ければ基本的にはすべて応諾することにしている。ところが、集会の直前になって、K君からキャンセルの連絡があったのだ。後にK君に質してみると、集会のパネリストの一人である酒井隆史（社会学者）と「その仲間たち」に対して、私があるところで「社民」と批判しているので、パネリストとしてふさわしくないという意見が、集会実行委員会であったためだという（「社民」というのは、今日の思想的文脈で言えば「ラディカル・デモクラシー派」ということだ）。私は、この話を聞いて呆れてしまった。民主主義を標榜し「スパイ」にさえ傍聴を許すほど「民主的」である者たちが、批判されたというだけで私をパネリストから排除してしまうほど「非民主的」だからである。私は民主主義者ではないから「スパイ」の傍聴は許さないが、反対意見の者と討論してもよいと思うくらいには民主的ではある。

現代の大学ではカルスタだポスコロだデリダだと「左派的」と称する退屈な言説が隆盛である。しかし彼らは「靖国」や「憲法九条」については（大学の外で）云々しているものの、大学の監視／管理体制には全く沈黙している。沈黙しているだけならまだマシで、最先頭で担っていることもあると仄聞する。「大学独法化」問題など今や（もともと）なきに等しい。その理由は以上のことからも明らかだろう、その「左派」性が、大学当局とのコンセンサスのなかで存在しているからである。問題は、左派を装うかどうかではない。大学における「コンセンサス・システム」（ランシエール）に対する闘いなのだ。

『LEFT ALONE』明石書店

絓秀実 ⊙Suga Hidemi
49年生。批評家として革命の思想に精根を傾けつつ「そんなもの来ませんよ」と笑い飛ばしもする男。主演のドキュメンタリー映画『LEFT ALONE』が各地を巡回上映中。

転向し、内務省の斡旋で「まんが原作者」となった小熊秀雄を思い起こせば、「転向文学」は「映画」や「まんが」といった動員力のあるメディアの下働きとしての役割をむしろ担わされている。そう考えると誰も頼んでいないにも拘わらず、自ら文学者はまんが原作者たるべきだと発言してやまない島田雅彦は翼賛下の文学者として時局を正確かつ自発的に読んでいることになるが、しかしこの新しい「翼賛」はもはや「文学」の助力、ないしは下働きさえ不要だ。

それは劇場で「国民」の一割、TVでは三割が必ず観てしまう「国民アニメ」たる宮崎アニメの存在を見れば明らかだ。ある場所で上野昂志との雑談でたまたまそういう話になり、記録の残るイベントではなかったのでその主旨を記すが、宮崎アニメの本質は、幼女や少女のスカートの下に執着してやまない彼の映像の性的嗜好のみならず、全体として翼賛下の表現として良く出来ているという点にあることで一致した。幼女／少女フェティシズムとファシズムとの感受性的一致について論じるにはスペースがないので別の機会とするが、それとセットになる兵器フェティシズム、「幼女」に仮託される「イノセント」さ（ナチズム下の「文学」の重要な主題である）に加えて、「働くこと」の賛美が宮崎アニメに常に含まれることはプロパガンダにいつでも転用できる重要な要素である。海外メディアから児童虐待ではと懸念が示される程、宮崎アニメでは共同体のために労働することが実は最大の美徳である。加えて、名古屋万博の「サツキとメイの家」やカレーのCMの映像のように「故郷としての日常」を想像するところも戦時下の「まんが」や「映画」がかつて行ったことの正確な反復である。この国では結局、ポストモダンなどやってこないどころか、サブカルチャーによってより始末の悪い再「国民国家」化が進行中であり、「文学」が今更、皇族のロマンスを描いたところで、国民を動員しようもなく、文学が時局に乗る切符を振りかざす健気さにしか見えないのはそれ故だ。

大塚英志 ⊙Otsuka Eiji
58年生。まんが原作者。『多重人格探偵サイコ』、『オクタゴニアン』他。

連載

奇妙な入試情景 ①

大西巨人

はし書き

本作は、むろん独立の短篇仮構（ワーク・ネヴ・フィクション）作品であり、同時に往年の小作短篇小説『ある生年奇聞（せいねんきぶん）』〔光文社二〇〇〇年刊短篇小説集『二十一世紀前夜祭』所収〕の、いわゆる「姉妹篇」である。作者は、このことを冒頭に明記する。

《ある小説家の二夜連続放送講演「続・年齢雑話」（録音より採取）。活字化の際、作者加筆若干》

先ごろ、私は、「年齢雑話」の中で、「私と同年配のある男は、いわゆる『早生まれ』であって、尋常小学〔六年制〕五年修了から六年を飛び越して……以下も、すべて旧制の学校です、……中学〔五年制〕に進み、さらに中学四年修了で五年に行かずに高等学校〔三年制〕へ上がったので、数え年十九で官立大学学部に入りました。戦前には、そういうことが、学制上可能でした。それだから、成績優秀の者は、尋常小学ないし中学の最終学年を経由することなく進学することができました。」と言いました。

その際のディレクターN君が、このほど小宅に来訪しました。複数の聴取者から、「年齢雑話」における「飛び級」談について、「中学四修で高等学校へ進学した実例実物は、かなり知っているけれども、尋常小学五年修了から中学生になった実例実物は、一つも知らない（話に聞いたことが、あるだけ）。そのような実例実物のことを、あの先生に話していただいて貰いたい。」という旨の通信が、来ました。そこで、お願いですが、たとえば「続・年齢雑話」の題目で、聴取者たちの願望に応（こた）えるような話をしてくださいませんか、――これが、N君の用件でした。

あらまし以上が、この「続・年齢雑話」の「来歴」（？）です。私の親しく知っている実例実物は、一つ（東山太郎のこと）だけでして、それが、果たして「聴取者たちの願望に応えるような話」であり得るかどうか、……とにかく、やってみましょう。

ここで、私は、あらかじめ次ぎのことを、お断わりしておきます（冒頭の「はし書き」に、「本作は、『ある生年奇聞』の「姉妹篇」と明記したことが、なおさら「あらかじめの、お断わり」の必要を増大しました）。

――『ある生年奇聞』は、「戸籍上生年月日が実際上生年月日にずいぶん先立っている希有（けう）の事例」の話です。主人公大岩則雄（おおいわのりお）について、〈「小学生時代にも中学生時代にも同学年生中最低体格生の一人であったのに、後年（二十歳前後）には中肉中背の男子になったこと」ならびに「精神的（頭脳的）にたいそう早熟な人間だったこと」が、「この『希有の事例』を順調に成り立たせたのでしょう。」〉というような叙述が為（な）されていて、それらは、本作の主人公東山太郎にまるでぴったりです。

それで、私は、大岩則雄と東山太郎とは、同一人物ではなくて、別人物であることを、前もって判然と皆さんに明らかにしておくべきである、と考えました。万一も

しも大岩則雄と東山太郎とが、同一人物だったら、たとえば下のような超異常事――ある人が、満五歳そこそこで尋常小学一年生になり、満十歳そこそこで中学一年生になり、満十三歳そこそこで高等学校〔現在の大学学部にほぼ相当〕一年生になり、満十六歳そこそこで官立大学〔現在の大学大学院にほぼ相当〕生、というような破天荒――が、そこに具現したことになります。どういう意味においても、断じて、それは、作者の意図ではありません。

この東山太郎（のプロトタイプ）は、私の遠縁でして、彼に尋常小学五年修了からの中学受験を熱心に勧めたのも、彼の両親にそのことを根気強く説得したのも、尋常小学三年から同五年までの組担当（持ち上がり）教師・豊国男子師範学校出のQ訓導〔現在の小学校教諭〕でした。私は、ほぼ同年の東山太郎と、かなり親しい仲だった。太平洋戦争中の一九四三年、東山太郎は、華北で戦死しました。

＊

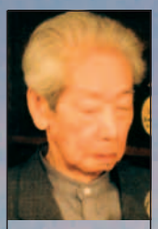
東山太郎も私も、各自の尋常小学時代ならびに中学時代、西海地方鏡山県企救郡S町――現在の北西海市豊国北区――に住んでいた。東山太郎の尋常小学は、中S尋常高等小学校（尋常科六年・高等科二年の編制）。私のそれは、下S尋常小学校（尋常科六年のみの編制。高等科へ進む者は、尋常高等小学校への転入が必要）。二人は、どちらも小学校高等科とは無関係でしたから、結局おなじ小学校に在籍したことは、ありませんでした。

「小学生時代にも中学生時代にも同学年生中最低体格生の一人であったのに、後年（二十歳前後）には中肉中背の男子になった」は、「一見してわかること」です。けれども、「精神的（頭脳的）にたいそう早熟な人間だった」は、「一見してわかること」ではありません。私がそれの諸様相を知ったのは、東山太郎本人からか、他の誰彼からか、聞いてのことだったはずです。

Nディレクターの言った「聴取者たちの願望に応えるような話」が、どんな話を意味するのかを、私は、実は十分にはわかっていませんでした。Nディレクターも、私と同様に、そのことを、実は十分にはわかっていなかったのでしょう。尋常小学五年修了から中学受験を敢行したのですから、その当人（東山太郎）が「精神的（頭脳的）にたいそう早熟な人間だった」のは、明々白々なことです。したがって、その種の話は、「言うもおろか」ではありますまいか。

もっとも、「聴取者たちの願望」は、「その当人が『精神的（頭脳的）にたいそう早熟な人間だったこと（そういう抽象的な話）』」をではなく、「当人が『精神的（頭脳的）にたいそう早熟な人間だったこと』」の具体的な様相をひたすら指示したのかもしれません。それならば、次ぎのような事例談は、まさしく「聴取者たちの願望に応えるような話」でありましょう。

▼「奇妙な入試情景」は、雑誌「早稲田文学」05年5月号に前半が発表されました。フリーペーパー「早稲田文学」では同作を2号に分けて再録のうえ、以降連載の予定です。なお、再録にあたっては初出時の誤字脱字を修正のうえ、著者による若干の加筆訂正がなされています。



大西巨人 ⊙Onishi Kyojin
19年生。太平洋戦争での徴兵経験をもとに描いた長篇小説『神聖喜劇』は現代日本文学の金字塔と称される。傘寿を過ぎてもみずからHPを持って新作小説を発表し続けている。

重松清 ⊙ Shigematsu Kiyoshi
63年生。『ビタミンF』（直木賞）をはじめ、泣かせたり勇気つけたり、様々な作風が魅力の小説家。「早稲田文学」の学生スタッフおよびデスクだった過去アリ。

貧しくてつらいもの（笑）（角田）

［重松］　当時お好きだった演劇って、どんなのですか?

［角田］　劇団青い鳥とか第三舞台とか、野田秀樹さんの「夢の遊眠社」も見たし、劇団ショーマ（高橋いさを）とか……

［重松］　キャラメルボックスなんかは?

［角田］　キャラメルは「てあとろ」の先輩なんですよ。

［重松］　じゃあ、学生時代の栄養として本と演劇どっちが多かったと聞かれたら?

［角田］　本ですね。

［重松］　そうか……演劇のおかげで残ったものはなにか?

［角田］　ほとんどないですね……恥ずかしさかな（笑）。なんで自分がセリフをひとまえで言えたんだろう、って思うんです。お芝居を見に行っても、目の前でひとが演技してることの恥ずかしさを感じてしまって。

［重松］　映画はどうでした?

［角田］　みんな映画にも詳しかったんで、それこそ追いつくために、ひとりで三本立てとかあちこち回りました。

［重松］　大学でそういう耳年増の連中に会わなかったら、どうなってたんだろう?

［角田］　ひとつの悲劇としてよく考えるんですよ。たまたま高校のとき成績がよくて推薦で地元の短大に行ってたら、小説は好きでも書く回路が見いだせなかったと思うんです。

［重松］　もしそうなっていたら、いまどうしてたと思いますか?

［角田］　アルバイトしてたでしょうね、横浜で。

［重松］　書きつづけていたと思います?

［角田］　思わないですね。

［重松］　だけど、喋るのが苦手だから書くほうを選んだ角田さんが、書いてなかったら、非常にキツくないですか?

［角田］　すごく。いちばん考えうるのが、アルバイトしながらネットで……。

［重松］　ブログの女王とかになって（笑）。

［角田］　それを夢見てたでしょうね（笑）。

［重松］　「小説が自分にも書けるんだ」と思った瞬間って、いつどんな感じでしたか。

［角田］　2年生の最初の授業で先生だった秦恒平さんが、上の学年のひとの小説を読んでくれたんです。「まんまるお月さま」というタイトルの、口語体で「生理がこない」と語るすごく短い話で。それを聞いて「あたし〜なんだ」という書き方でいいんだって思ったときかな。

［重松］　それって、70年代の終わりから新井素子さんたちがジュニア小説でやってたスタイルだよね。

［角田］　知らなかったんですよ。

［重松］　だって鎖国してたんですもんね（笑）。

Kakuta&Shigematsu

［重松］　角田さんは就職したんだっけ?

［角田］　就職してないです。私、大学3、4年で少女小説を書いてたんですよ。

［重松］　つまり、すでにデビューしていた、と。学生作家ですよね。どういう経緯でデビューされたんですか?

［角田］　19のとき、小説の授業がはじまってすぐに文芸誌に応募したんですよ。そしたら最終選考に残って。

［重松］　文明開化が始まっていきなり日清戦争に勝っちゃった、みたいな話だな。チョンマゲ時代の角田さんの前で「大江」とか「武田」って言ってたヤツのその後の人生、知りたくなっちゃった……口惜しいだろうな。

［角田］　最終で落ちたんですけど、「年齢がすごく若いしもったいないから、若い子向けの雑誌で書いてみたら」って。それで、「10代の子が書く、10代の子が読む雑誌があるんだろう」と想像して書いたんですよ。

［重松］　それは、別の名前で?

［角田］　はい。言いませんけど（笑）。

［重松］　そうか……じつは、『対岸の彼女』に出てくる女性は、たとえば集英社のコバルト文庫のような少女小説を読んでいたふたりなんだな、ってイメージがあったんです。80年代にコバルト読者だった子たちの自意識とかいろんなものが、30代の行動や心理にもにじんでいる感じがしたんです。だから、偶然のように角田光代は「コバルト的な女の子のその後」を描いたんだなと思ってたんだけど、本当に少女小説の書き手だったとは思いませんでした。少女小説作家としてのご自分は、営業成績も含めて、どうでした?

［角田］　最低です。

［重松］　なにがいけなかったんだと、いま振り返って思う?

［角田］　自意識と、あとは少女小説の世界を知らなかったことかな。最初は応募した文芸誌をぜんぶ読んで、どういう作家が出てるかも知って応募してたんだから、もう一回チャレンジすればよかったんですよね。それなのに少女小説に行って、賞をもらってはじめて少女小説を見て、「あれ?」って。

［重松］　後から気付かないでよ（笑）

［角田］　いまだったら歩み寄れたかもしれないけれど、20歳ぐらいの潔癖さと偏屈さで、変えられなかったんですよね。あのころってどうしても自意識がたかいから、どうしても暗く悩みがちだし。

［重松］　うんうん。

［角田］　編集者が何度も何度も「明るい高校生活とかロマンスを」って言うんですけど、「明るい高校生活なんて世の中のどこにある?」って思ってたんで、書けないんですよね。何度も揉めたり悩んだりして、それでもなおさずに書いてたから、二年やるうちにあまりにも売り上げが下がって。

［重松］　あそこの世界は数字がシビアに出てくるからね。

［角田］　しかもそのときそのジャンルがバカ売れしてる時期で、みんなすごく数字が高いのに、自分だけ（笑）。

［重松］　いまふりかえって、キャリア的には抹消したいかもしれないその二年間が残したものってあります?

［角田］　ほとんどないんですけど、自分で働いて稼げるようになったことですね。実家から引越して独り暮らしをはじめた、それだけです。

［重松］　そのあと「海燕」でデビューしたわけだけれど、それでも開国から早いよね、ほんとに（笑）。変な型を覚えずに来たから、すんなりいったのかな。

［角田］　それは思いますね。たとえば、大江健三郎がすごく好きだったら、書き出すまでに時間がかかると思うんです。それが全然ないから、「これでいいんだ」って思える部分が多かったんでしょうね。

［重松］　「たくさん読んだから小説を書く」っていうのもあるけど、角田さんはその逆だったんだ。

［角田］　でもデビューしてからは、読んでいないことですごく苦労しましたよ。

［重松］　でも、いまは書評の書き手としても人気と信頼を得ていますよね。

［角田］　23才でデビューしたとき、まわりはみんな年上だから、「あれは読んだか?」「これは読んだか?」って聞くんですよね。「誰ですか?」って聞くと、「それも知らないのかあっ!」って。大学に入ったときの「私いま、無知の最底辺にいる」って感じをもう一回やり直したから、そのとき、書評の仕事を頼まれたら全部引き受けようって決めたんです。

［重松］　負けず嫌い?

［角田］　というより、「最底辺でいいや」って開き直る根性がないんですよね。小心者（笑）。

［重松］　でも、いまでは「読める作家」扱いでしょう?

［角田］　おかしいなあ（笑）。15年前はね、「こんだけ本を知らないヤツがよく作家になった」って言われてたのに、どうしていま読む側に入ってるんだろう。謎ですね。

［重松］　感慨深い?

［角田］　でもほんとはやっぱり読んでないって思いますけどね。

Kakuta&Shigematsu

［重松］　本当に高校時代までは「背骨のないひと」ですね（笑）。でも、成長期に無理な運動すると脊椎歪曲症にかかっちゃうとか、うさぎ跳びをやると膝がダメになっちゃうってありますよね。角田さんは逆に、先に背筋がどんどんついてきたので、後追いで背骨ができあがっていったひとなのかなと。

［角田］　そうかなあ。

［重松］　角田さんって確かにデビューはすごく早かったし、若いうちに数々の受賞歴もあるけれど、根っこはオクテなんだと、僕は思っています。書きながら育っていく、書きながら見つけていくところが多かったんじゃないか、と。それは角田さんの作品の登場人物たちが、生きながらなにかを得たり失ったり、歩きながらなにかを見つけたり捨て去ったりすることともつながりそうな気もするのですが、ここから先は、さすがに雑談ではうかがえない（笑）。というわけで、あえてユルユルでスカスカのままインタビューを構成してもらうことにして……ねえ、角田さん、つづきは『風花』あたりでビールでも飲みながらにしませんか?

作家のイメージってどんなでした？（重松）

［角田］　芝居にしろコンサートにしろ、イベントが頻繁に行われてる場所かな。

［重松］　そのあと町歩きとかってしました？

［角田］　しなかったんですよね。渋谷にしても新宿にしても、知らないとどこにも行けないじゃないですか。横浜は一カ所にいろいろ固まってるのに、新宿だと東口を出ても「伊勢丹があるな」ぐらいで。だから、「新宿ってなんにもないところだなぁ」って（笑）。

［重松］　ってことは町を歩くときにランドマークを先に設定してたんだよね。それ以外は平坦な感じになっちゃう？

［角田］　はい、見えません（笑）。

［重松］　それって、いまの角田さんが旅をするときの視線とぜんぜん逆じゃない？

［角田］　趣味がはっきりしなかったこととともたぶん関係あるんだろうけど……。

［重松］　早熟な文学少女とか演劇少女とかもいるけど、そうではない少女だったんだ。

［角田］　そうですね。

Kakuta&Shigematsu 👍有

［重松］　それだけ横浜好きだったのに、わざわざ東京の早稲田に行ったのには、なにか強烈な理由があったんですか？

［角田］　子供のころからずっと小説家になりたかったんだけど、どうやっていいかわからないから調べたら、東京にふたつだけ創作科のある大学があったんです。でも勉強が嫌いだったので、推薦で行こうと思ったら、三者面談で「あなたの成績ではどこにも推薦できません」って。

［重松］　勉強が嫌いだったら推薦できないよ、たぶん（笑）。

［角田］　そう、それで受験しないと小説家になる道は開けない、と。

［重松］　当時、作家のイメージってどんなでした？

［角田］　「貧しくつらいもの」（笑）。

［重松］　どこでそんなイメージが……。

［角田］　太宰治とかですね。太宰は貧乏じゃないけれど、暮らしが大変そうな小説じゃないですか（爆笑）。「女生徒」に出てくる女生徒が「貧乏だろう」と想像するような。

［重松］　貧乏でもいいと思ってたの？

［角田］　はい。

［重松］　そのころ、自分が作家になったらどういう小説を書くとイメージしていらっしゃいました？

［角田］　それが、まったくわからなかったんですよね。

［重松］　イメージできないんだが、作家になりたい、と。

［角田］　そもそも小学校時代にすごく喋るのが苦手だったんですよ。でも文章なら書けるという「書く快感」がすごくあって、高校までその気持ちが続いてたんです。だから具体的な作家像じゃなくて、ただ書きたい、でもなにを書いたらいいかわからない。

［重松］　そのときに、二つの方向があると思うんです。ジャーナリストと作家の違いというか、「現実の世界を言葉で表現したい」という欲求と、「虚構の世界をつくりたい」という欲求。角田さんの場合は、ジャーナリスティックに社会を描きたいという感じではなかった？

［角田］　なかったですね。社会をあまりにも知らなかったです。

［重松］　周りの友達と比べても知らないほうだった？

［角田］　はい。

［重松］　なぜだったんでしょう。

［角田］　知ろうという気持ちがなかったからかな。外の世界に好奇心がなかったし。でも、自分が経験したことなり、歩いてきて見たことなりを書くのは好きだったんです。日記ですよね。

［重松］　あのころだと椎名誠さんとかの、半径50メートル以内を描く日常的なエッセイが人気でしたよね。高校時代にはそういうものは読みました？

［角田］　読まなかったですね。椎名誠さんを読んだのも大学生になってからでしたし。

［重松］　なんか、高校時代の角田さんといまの角田さんって、少なくとも表面的には正反対みたいに思えるんですが……。

［角田］　大学がね、私の開国でした（笑）。黒船来航みたいな。

Kakuta&Shigematsu 👍有

［重松］　85年だと女子大生ブームの名残で、大学生といえば「遊び上手」のイメージがあったころでしょう。どんな同級生がいました？

［角田］　まじめなひともいたし、大学生ブームをまだやってるひともいたし。

［重松］　男子学生と女子学生、どっちに刺激されましたか。

［角田］　刺激はクラスにはなくて、お芝居のサークルにあったんです。

［重松］　女優志望だった？　演出？

［角田］　役者のほうですね。「てあとろ50'」というところに入って。

［重松］　なぜそこを選んだのかな。

［角田］　いちばん雰囲気が優しそうだったんです。よそはすごく怖いけど、そこは授業優先だったし……。

［重松］　ものすごく「フツウ感」が漂ってる（笑）。じゃあ……角田さんのバックボーンとして最も知られているのは「旅」ですよね。学生時代にあちこち行きましたか？

［角田］　何回か。でも、あまり楽しくなかったというか、行って帰ってきただけですね。

［重松］　それは海外？

［角田］　海外は三回ぐらいかな。

［重松］　どこだったんですか？

［角田］　海外はエジプトとサイパンと……。

［重松］　「サイパン」って、いかにもバブル時代の大学生（笑）　……あとは？

［角田］　ニューヨークです。

［重松］　80年代後半の女子大生そのまんま。でも一人旅だったとか？

［角田］　いえ、友達と。一人旅は……金沢に（笑）。

［重松］　ものすごくわかりやすくて、だから、わかんなくなっちゃった（笑）。結局、いつ黒船が来たんですか？

［角田］　あ、でも、クラスコンパに行ったらみんなが「武田（泰淳）がさあ……」とか「大江（健三郎）がさあ……」とか話していて。

［重松］　ヤなやつらだね（笑）

［角田］　わたしは武田も大江もしらないので、「どこの友達？」って（笑）。

［重松］　「武田信玄？」とか（笑）。でも、それってある面で教養の差を思い知らされたわけだけど、負けなかった？

［角田］　負けなかったですね。そのひとたちがあんまり魅力的じゃなかったせいもあるけど、まだ一般教養の時期だったから「こういうひとたちはたぶん国文科にいくひとたちなんだ」って。

［重松］　そういう連中に追いつきたいって意識は？

［角田］　なんとかしなきゃいかんとは思いました。

［重松］　行動に移した？

［角田］　移しましたね。古本街に行って知らない名前のひとの本を買って読んだり、皆の会話で耳に残っている名前を買って読んだり。

［重松］　それによって出会った作家や作品で、いちばん影響を与えたものはなんですか？

［角田］　尾崎翠ですね。

［重松］　尾崎翠と、そのほかの素通りしていった作家との、いちばんの違いってどこだったんだろう。

［角田］　相性じゃないかなあ。

［重松］　その相性を言葉で言うと、どんな感じ？

［角田］　「あ、いいの？　これでいいの？」って。

［重松］　それまでは「小説はこうあるべきだ」とか思ってたんだ？

［角田］　「生きるべきか死ぬべきか」みたいなこととか。

［重松］　なるほど。そのときの「これでいいの？」という発見は、いまの角田さんの作品にどう影響してますか？

［角田］　そうですね。作品世界というより、読みやすいこと―たとえば子供からお婆さんまでが読みやすく最後まで読めるという点で、自分もこういうものを書きたいなと。

Kakuta&Shigematsu 👍有

［重松］　ところで女優・角田光代の才能はどうでした？

［角田］　ないですね。

［重松］　どこがだめだった？

［角田］　いちばんは声の問題で、音域がすごくせまいんですね。すごく抑揚をつけても平淡だから、なにを言っても棒読みみたいになっちゃう。大きい声も出ないし。

［重松］　演技力は？

［角田］　自分ではがんばってましたけど、あんまり評価されなかった。

［重松］　演出やシナリオに回ろうとは？

［角田］　なかったですね。ある先輩の脚本がすごく好きで、それを演じたいという思いが強かったから。

角田光代 ⊙ Kakuta Mitsuyo

67年生れ。作家。小泉今日子主演で上映中の『空中庭園』はじめ、せつないけれどやわらかい作品たちが人気沸騰中。ほとんど冒険の旅エッセイもオススメ。

WASEDA bungaku FreePaper
Vol.01_2005_11
早稲田文学

WB ¥0

大西巨人
モブ・ノリオ
島田雅彦→寺田寅彦
角田光代＋重松清
いとうせいこう＋奥泉光
大杉重男
大塚英志
絓秀実
高原英理
横田創
福永信＋長嶋有
渡部直己
斎藤美奈子

愉しい文学
Wonderful BUNGAKU

連載インタヴュー　重松清の部屋①

角田光代の開国前夜

［重松］ ユルいインタビューをさせてもらいます。角田光代さんの愛読者や、作品を批評的に読んでいるひとには申し訳ないぐらいのユルさです。でも、あんがいと肩の力を抜いたフニャフニャのインタビューへの答えにこそ、作家の「背骨」が覗いてくれるんじゃないか。そんな希望と期待を持ってここにうかがったのですが、そもそも、角田光代という作家は、いつ「作家」になったんだろう。角田さんが18歳のときって、西暦でいうと何年ですか？

［角田］ 85年くらいです。

［重松］ そのころどんな音楽聞いてました？

［角田］ サザンにハマってましたね。

［重松］ 詩が好きだったの？　それとも曲？

［角田］ なにがよかったんでしょう……ぜんぶかな（笑）。

［重松］ サザン以前は？

［角田］ はっきりした好みがなくて、友達が聞いてるのを借りたりしてましたね。

［重松］ 偏愛するものがなかったんだ。それって文学でも？

［角田］ 文学にしても。高校に上がるくらいのときのファッションだとハマトラとかが流行ってて、それを目指すんですけど、お小遣いもあんまりないから買えなかった。

［重松］ バイトをしてオシャレにお金突っ込んだりはしなかったんだ。

［角田］ はい。バイトが禁止の学校で、つらかったですね（笑）。

［重松］ ご出身は、東京近郊でしたよね。

［角田］ 横浜の緑区です……いまは都筑区っていうらしいですけど。

［重松］ ということは、港町って感じじゃなくて山の手系？

［角田］ 田舎系ですね。そのころ横浜駅周辺が世界一の繁華街だった（笑）。

［重松］ 山口県にいたぼくにとっては、東京は矢沢永吉的な、あるいは長渕剛的な「花の都。大東京」のイメージだったんですが、横浜の高校生から見た東京ってどんなだったの？